

溺愛姉妹

トクサン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦争と恋愛に手段は選んでられない。

監禁、投薬、夜這い——あらゆる手練手管を用いなければならない。

誰だって戦う前に準備はするだろう、それと同じである。

ドロデレ？ 失礼な——純愛だよ。

目次

| | |
|--------------|----|
| カムラの里 | 1 |
| 世界に一人だけのメスガキ | 11 |
| 貴方だけを見つめた結果 | 33 |
| 十年前の貴方へ | 52 |
| 空に挑む | 65 |
| 弟が姉に勝てる筈がない | 85 |

カムラの里

カムラの里に畢竟の狩人在り。

彗星の如く現れた若人、天馬空を行く如き活躍にて頭角を現す。

その力、一頭地を抜き並び立つ者なし。

彼の英雄を持つ里は、手の舞い足の踏む所を知らず。

世故に長ける商人は云う、『彼の御仁、その実力は噂と寸毫も違わず』と。

人口に膾炙する狩人、人はカムラを『英雄の守る里』と呼んだ。



「ふーッ……」

息を吐く、深く吐く。

蒸気を吹き上げる槍を払い、手元の引き金を握り空薬莖を排出。軽い音を立てて転がるそれを見送り、周囲に別のモンスターが存在しないか注意深く見渡す。目前には息絶えたジンオウガが一匹、その逞しい肉体には夥しい程の傷跡が——一つとして存在しない。ただ頭部のみを吹き飛ばされ、頭蓋と眼球を撒き散らし、息絶えた嘗ての雷獣が在るだけ。

生物が死に絶えた特有の血と鉄、そして脳髓の匂い。任務を終え、手元に擦り寄って来たガルク、その鼻先を優しく撫でる。同時にポーチから取り出した干し肉をアイルーに投げると、嬉々とそれを齧りだす。この様な凄惨な現場も慣れたものだった。

「お疲れ様でした、小太郎」

不意に、声が聞こえた。振り返れば翔蟲の糸を手繰り寄せ文字通り飛んできた巫女服の女性。四本の指で確りと大きな盾と槍を持つ彼女の名は——ミノト。

彼女は頭部の吹き飛んだジンオウガを一瞥すると、小さく頷きながら問う。

「成果の程は」

「……ジンオウガ、アオアシラ、タマミツネ、ナルガクルガの計四体、周辺のモンスターは全て狩猟済、小型も含めて里の脅威となる存在はもういない筈です」

「結構、事後処理はお任せを、後詰の者達には梟にてクエスト達成の報告をしておきます」

「頼みます、ミノトさん」

「ミノトお姉ちゃんと呼びなさい」

「……帰還します」

「あつ、ちよつと!」

それだけ口にする、小太郎はガルクに跨り軽く腹を蹴る。途端に凄まじい速度でガルクは駆け出し、アイルーは噛んでいた干し肉を口に啜えたままその背を追い出した。小さくなつていく狩人を見つめるミノトは小さく溜息を零すと、そのまま手にしていたランスを背に戻す。

周囲に脅威はない、鳥の囀り一つ。文字通り里の脅威となるモンスターを狩り尽くしたのだろう。足元に倒れ伏す巨大な獣の前に、ミノトは目を瞑り呟く。

「昔はあんなに可愛かったと云うのに……時間の流れは残酷」

■
憂いた顔から零れた言葉が、彼に届く事はなかった。

風魔小太郎。

カムラ里を守る狩人のひとり。得物は特殊なガンランスを使用し、過去里を襲った災害、百竜夜行の撃退に貢献。難度七を超えるクエスト成功実績を多数持ち、里の抱えるハンターとしては上位級の実力を持つ。その容姿も非常に優れており、イオリ、ウツシ、コタロウの三美男子と呼ばれていたりする。

その実態は。

「カゲロウさん、先ほどミノトさんと話してから勃起が治まらないのですけれど一体何の病気なのでしょうか……俺は死ぬのですか」

「ふうむ、恐らく『セックスしないと治らない病』でしょう……診断書を出しておきますね、お薬はないです、ご自宅で安静になさって下さい」

「そんなエロ同人みたいな診断書を俺にギルドへ提出しろって云うのですか!?! ギルドの受付ミノトさんなのですよ!?!」

「それでは『PCパーツ』にしておきますね」

「ありがとうございます!?! ありがとうございます!?!」



「思うのだけれど、ハンターってさクソだと思っんですよ、武器や防具の製作費、維持費、メンテナンス及び修繕費、狩り道具費用、オトモ管理費、雇用費、修練費、貿易税、怪我した場合は治療費に任務失敗した場合は賠償費用、生きて行くだけで家賃、食費、家事アイルー雇用費、住民税、ハンターライセンス料、ギルド在籍費とか掛かるのに、クソじゃない? ねえ、まじクソじゃない?」

「クウーン」

ガルクの腹に足を絡めながら自宅で愚痴を吐く小太郎。髪を後ろに流し、着込んでいた防具を今にほったらかしにして愛犬に絡むその姿からは上級ハンターの影など微塵も見えない。

ハンターというのは兎に角金が掛かる。武器や防具の制作、維持もそうだし雇用する戦闘用のアイルーやガルクにも金が掛かる。更に言えば回復薬や痺れ罫なども購入しなければならないし、当たり前だが消費期限が切れた道具は買い替えが必要である。一年前の回復薬など飲んだ日には腹が捻じ曲がる。

一応、必要最低限の道具は『支給品』として提供されるものの、回復薬は即効性のあるグレートではないし、罫等に関しては殆ど支給されない。ガンナーなどになった日には瓶やら弾薬やらで更に金が掛かる。

大抵、ハンターというものは数人でクエストをこなすのだが、そうになると参加した人数分だけ報酬が分割される。それならまだアイ

ルーやガルクを雇って使った方が安いと考え現状に至る訳だが――。
「働いても働いても、暮らしは楽にならざりけり……世知辛い世の中だね、キヤット」

「クウーン」

ガルクの鼻先を指で摘みながら小太郎は項垂れた。

ハンターと持て囃されようとも、実際はこんなモンである。

尚、キヤットとはガルクの名前である。オトモアイルーの名前ドツグ。名付けた時は双方に凄い目で見られたけれど、どうせ言語分らないだろうし、ヘーキヘーキと小太郎は高を括っていた。

「そもそもさ、頭おかしいよねハンターって、生きるためにハンターをやっているのに給料の殆どが武器と防具に消えていくんだぜ？」

ドツグとキヤットの武器と防具もさ、良い代物揃えようとすると高いし、少しでも安全に速く狩りを終わられるようにって強い装備を整えると更に強いモンスターを押し付けられて、そのモンスターも早く狩れるように更に強い武器と防具を揃えたら、更に更に強いモンスターを押し付けられて……ほんとあたまおかしい」

「クウーン」

「聞いている？　ねえ聞いているキヤット？」

「クウーン」

「御主人、キヤットが困っているにや」

「お前にキヤットの何が分かるんだよオン！　オラア！」

スライディングしながらドツグ（アイルー）を抱えると、うわっ、面倒なのに捕まったという顔をされてしまう。哀しい、そんな顔するとイオリ・ブートキャンプに強制参加させちゃうゾ。

「小太郎君、居ますかあ？」

「！　この声、ヒノエさんかッ」

玄関先より聞こえる声に小太郎は狩猟の時に見せる様な素早さで以て立ち上がり、髪を整え服装を正す。この間凡そ一秒。囲炉裏を囲んで然も、「食後の一服中です」という体裁を整え声を出す。ドツグとキヤットの二匹はそんな主人を何とも言えない表情で見っていた。

「開いています」

「失礼しますね」

そう云つて扉を開け姿を見せたのは、予想通りミノトの姉であるヒノエであつた。妹とは対照的な垂れ目と温和な性格、得物は弓でハンターとしての顔も持つ。普段はヨモギの経営する茶屋の団子を頬張っているが——流石に今は持ち込んでいないらしい。

勿論美人である、巫女服が映えて眩しい。

彼女は後ろ手で扉を閉めると、いつも通りの笑みを浮かべながら上がり框に腰かけ、小太郎の足先まで頭の天辺までじつと見つめる。任務から帰還するといつてもこうだ、怪我がないか確認しなければ気が済まないらしい。

一通りの確認を終えると小さく頷き、口を開いた。

「小太郎君、警邏任務ご苦労様でした、フゲン様も小太郎君が居ると安心できると大層喜んでおりましたよ」

「左様ですか、それは何より」

「報酬はミノトちゃんが戻り次第、色を付けて手渡しに来ますからね」
「いつも助かります」

囲炉裏前に座り、穏やかな表情で頭を下げる。その雰囲気は正に冷奴。恰好の良い人間をクールガイと云う、クールは冷たい、ガイは奴、冷たい奴、冷奴。^{ひやっこ}完璧である。しかしそんな賺した態度が気に入らなかつたのか、目に見えてヒノエの機嫌が悪化した。

「……んもう！ お姉ちゃんと二人きりなのですから、偶にはもう少し砕けた態度で接しても良いのではないですか!?!」

「それは——おぶっ」

一体何がそんなに気に障つたのか。冷奴なのに。いや、冷奴だから怒つたのか。これには我が国の伝家の宝刀、遺憾の意を表明せざるを得ない。肩を怒らせたヒノエはずっと体を寄せ、指先で小太郎の頬を付く。「えい、えい」と口にしながら人差し指を突き出すヒノエ。髪先からふわりと香る花の匂い。小太郎はそんな彼女の姿を横目に、内心で叫んでいた。

——これだよ、この距離感ガバガバ姉様のせいで己は道を誤つただ。

風魔小太郎は元日本人であり、現カムラの里人である。

元を辿れば桃太郎宜しく赤子川流しにあつていた所を里長であるフゲンに拾い上げられ、気が付けば主食団子で生活を開始し、ヒノエ（年齢不詳）とミノト（年齢不詳）に構われ続け、戦闘民族カムラ人の例に漏れず「里に住むなら最低限戦えないとね！」とウツシ教官に扱かれまくった結果、『あれ、この子意外とハンターの才能あるんじゃない？』的なのわつつわした理由で訓練場に放り込まれた後、幼子特有の『ヒノエ姉様とミノト姉様を守る位には強くならねば』と考えたのが運の尽き。

気付けば順調にハンターの道を転がり落ち、今では里一番の便利屋ハンター。

だってモンスター狩るとヒノエもミノトも喜ぶし、「凄い凄い」と褒めてくれる二人を見るのが嬉しくて、思春期特有の見栄っ張りを貫き通してしまったのだ。

考えてもみて欲しい、小学生の頃から此方を構い倒す美人な姉妹におはようからお休みまでべったりされたらどうなるか。それはもう、英雄願望の一つや二つや三つ持つてはおかしくはないのだ。

というか十年前から二人の容姿が変わっていなくて怖い、実際二人は幾つなのだろうか？ 竜人族なのだから寿命は人間よりも長いだろうけれど——少なくとも三十は……。

「小太郎君」

「——はい」

「今何考えていました？」

「ヒノエさんの事を考えておりました」

「まあ♡」

ヒノエは満面の笑みを浮かべ、両手をそつと胸の前で合わせた。尚、ヒノエの何について考えていたかは口を割る気はない。小太郎は賢い（自己申告）のだ

「嬉しい事を云ってくれるではありませんか、それじゃあ今日はお赤飯ですね」

「なんで？」

偶に彼女は突拍子もない事を云う。いや、偶にはないかもしれない、結構な頻度かもしれない。この前も「ヨモギちゃんのうさ団子はまだ癌には効きませんけれど、その内効くようになりますからあ」と云っていた。それは最早秘薬では？ 小太郎は訝しんだ。

「ああ、そうだ」

不意に、ヒノエが体を離して手を打った。

「伝え忘れていたのですが、先ほどウツシ教官が——」

「すみません所要の腹痛が出来たので失礼します」

「訓練を……あれ？」



小太郎は走った、狩人としての全能力を駆使して駆けた。何なら翔蟲まで使って逃走した。

此方は今警邏任務から帰還したばかりなのである、何が楽しくて帰宅後即訓練に赴かなければならないのか。黒企業どこの話ではない、下手しなくても死ぬ、ウツシ教官なら嬉々として殺しにかかる。あの人は、そういう人だ。ウツシ教官と云えば訓練、訓練と云えばウツシ教官。「愛弟子」と云いながら、嬉々として此方の致死量に至る訓練メニューを押し付けてくる姿は正に悪魔。流石忍者、忍者汚い。

「おう小太郎！ 此度の警邏任務ご苦労——ん？」

「あ、小太郎兄ちゃん！ 任務お疲れ——あれ」

「あ、小太郎さん、任務大変でしたよね、おつ——走って行っちゃった」
里を走り回る中、労う言葉が飛んでくるものの悉くを置き去りにする。申し訳ないけれど今はそれどころではない、下手をすると今夜も寝かせて貰えないかもしれないのだ。最悪朝まで特訓、修練、訓練三昧である。小太郎は無性に泣きたくなった。

そうだ、ロンディーネさんの所に行こう。事情を話して、船を貸してもらおうのだ。そうして沖合に出てほとぼりが冷めるまで休む。そうすればきつと、ウツシ教官とて。

「愛弟子く……——」

幻聴が聞こえる。酷い、幻聴だ。

風を切る足は正に韋駄天、百メートル十秒を切る全力疾走は景色を背後へと置いていく。翔蟲が戻り次第手繰り寄せ、宙を舞い、屋根上を走る。時折里人が声を掛けようとするものの、それすら背後に消えていく。

「愛弟子く——！」

幻聴が近い。おかしい、己は過去最速で走っている、これ以上ない程に全力だ。ガルクの全力疾走にすら匹敵する。だというのに——背後から誰かの、駆ける音が聞こえてくる。砂を蹴る音が。

「愛弟子イ——！」

「うおおおおおおおおアアアアアア——！」

声が直ぐ傍から聞こえた、ほんの数センチ隣だった。飛び上がり、身体を回転させ全力の蹴撃を放つ。片手剣の盾程度であれば凹ませ、拉げさせる自身がある渾身の一撃であった。しかし小太郎の放った蹴りは空間を抉り、空気を弾けさせたのみ——直ぐ脇に、髪を靡かせたウツシ教官が立っていた。

外した——否、放った蹴りを潜られた。

ウツシ教官の目が三日月を描いていた。反対に、小太郎の目には涙が滲んだ。

「おっと組み手かい？ 確かに素振りや型稽古ばかりでは飽きが来る、良い提案だ！ 付き合おうじゃないか愛弟子——！」

「死ねえええエエエツ——！」

凡そ人間に向けて放つ攻撃ではない、蹴撃、打撃、掌打。流水の如く放たれるそれを軽々と、或いは易々と避け続けるウツシ教官。放たれる打撃から乾いた破音が鳴り響く、だと云うのに当たらない。当てられない。

小太郎は欠片も容赦せず、それこそ本気で殺す気で攻勢に出ている。その殺気すら伴う気迫にウツシ教官は嬉しそうに頷き、徐に手を挙げると目にも止まらぬ速度で振り抜く。風切り音、同時に小太郎の脇腹が爆ぜた。

「ぐ、オ………!？」

否、爆ぜたと錯覚するほどの衝撃が走ったのだ。思わずくの字に折れ曲がった小太郎の顎に、薄らと笑みを浮かべたウツシ教官の鞭打。骨を打つ音と共に衝撃が首を奔り、脳が左右に揺れた。言葉も無かった。

膝の力が抜け、その場に崩れ落ちる小太郎。それを見下ろしながらウツシ教官は満面の笑みを浮かべる。

「勢いは良し、気合も良し、技の練度も速度も申し分なし！ 型稽古は殆ど完璧だね！ でもやはり、まだ基礎体力が出来上がっていない様だ——取り合えず今日は準備運動で里を五十周と腕立て三千回、上体起こし三千回、屈伸六千回、それから武器の素振りと一連の動作を繋げた模擬訓練をやるうか！」

「——あ——」

崩れ落ちたまま何かを口にしようとする小太郎。しかし痺れた顎が動かない、舌が揺れるばかり。砂利を踏む音が聞こえた。眼球を動かすとヒノエが自身を追ってきたのだろう、翔蟲を使って飛び降りてくる所であった。

自分と同じ距離を駆けた筈なのに、息一つ上がっていないのは何故なのだろうか。

「あらあら、何処に行ったのかと思えば……早速ウツシ教官と修練に励んでいたのですね」

「ああ、ヒノエ君！ 丁度愛弟子から体術の実践訓練を提案された所でね、その前は自主的に里で翔蟲を使った長足訓練を行っていたよ！ 任務が終わったばかりだというのに、全く以て向上心の塊のようなハンターだ！ 僕も鼻が高いよッ！」

「ふふふ、それは勿論、私の小太郎君ですからあ」

違う、そうじゃない。小太郎は叫びたい、叫びたいが叫べなかった。ただ呻きながら拳を握り締め、震える事しか出来なかった。惨めだ、己はなんと惨めなのか。無性に泣きたかった。地獄への道は善意で舗装されているという。

正に、正にである。

ウツシ教官が満面の笑みで、小太郎を見る。

その口が地獄へと続く言葉を紡ぐのを小太郎は見守るしかなかった。

「それじゃあ愛弟子——訓練、始めようかつ！」

「……………あい」

世界に一人だけのメスガキ

風魔小太郎は日本人である。

当初、彼はこの世界が創作物であると知らなかった。最初は戦国時代か江戸時代にタイムスリップしたのだと心底信じていたのだ。しかし、初めて小型モンスターの群れを見た時に、「あれ、白亜紀？」と時代に疑問を感じ、里長であるフゲンに「お前も里の人間である以上、最低限自衛出来ねばな……聽て立派なハンターに、モンスターハンターになるのだ」と云われ漸く、「あ、これモンハン」と理解したのである。

尚、彼はモンハンをプレイした事がない。凡その想像は『原始人のマンモス狩り』である。どうぶつの森だったら良かったのにと心底残念がった。

さて、今や上級ハンターとして腕を鳴らす小太郎であるが、その道中は苦難に満ちたものだったと断言出来る。ハンターを生業とする^{イメージ}と決めたとして、最初に問題となったのは武器の類であった。幸いこの世界に於いての【人間】——或いは、言葉だけが同じであつて中身は全く異なる種族なのかもしれないが——は想像以上に頑丈である。

頑丈ではあるが、それでも常識の範囲内の話。首を刎ねられれば死ぬし、手足が挽けても死ぬ。出血が酷ければ失血死するし、病気にも罹る。寒さや熱にある程度耐えられても、対策を怠れば勿論死ぬ。

つまり何が言いたいかと云えば肉体的頑強さはあれど、あくまで生物の範疇であるという事である。モンスター程幻想的な存在ではない。そうなれば自然、選択できる武器は狭まってくる。

モンスターの外皮というのは防具に利用される程に硬く、頑丈だ。この時点で「片手剣」、「双剣」、「弓」と云つた選択肢は除外された。柔い外皮を持つモンスターであれば問題ないが、溶岩に温泉気分で浸かる様な岩肌を持つ連中のそれを貫けるとは考えられなかったから。そうなると眼球や口内、鼻といった部位を狙う事になる訳だが、動き回りかつ暴れまわるモンスターのそれを狙える気が全くしない。熟

達のハンターとなれば可能だろうが、そこまで辿り着くのに何年かかるか、そもそもその間に死亡したら意味がないと小太郎は思った。尚、中には剛弓で以てして外皮を貫く怪物ハンターも存在するが例外とした。小太郎は現実を見たくなかったのだ。

最終的に熟考を重ね、残ったのは「ガンランス」、「大剣」、「ハンマー」、「ライトボウガン」、「ヘヴィボウガン」の五つ。

当初小太郎は、「殴れば殺せる理論」を信奉していた。というのも、何故中世メイスや棍棒と云った武器が普及したのかを考えれば、如何に硬い鎧を身に纏おうとも衝撃までは逃せないという結論に至る。ゲーム内ではスタン、つまり気絶であるが、現実で行えば脳みそシェイクである。

要する硬くて重いもので顔面をぶん殴れば、理論上どんなモンスターであっても殺せるという話である。とても頭の良い解決方法だと当時は思った。

——そう思っていたのだが、後に何発ぶん殴れば殺せるのかが分からないという問題が浮上した。

小型のモンスターならば良いだろう、しかし大型のモンスターとなればハンターの何倍、何十倍、下手をすると何百倍という凶体を誇る。凶鑑で見た時小太郎はぶったまげた、こんな相手にするとか絶対頭イカれていると思った。実際に討伐したハンターを見て思った、やっぱりイカれていたと。

更にモンスターは例外なく巨軀に見合わぬ俊敏さを誇っている。さて、そんなモンスターを相手に顔面にフルスイングをカマせる隙は何度あるだろうか？　そもそも人間と違って連中の頭蓋の硬さは岩の如くであり、身の丈を超える武器を振り回せるハンターであっても、強大な凶体を誇るモンスターからすれば木の枝みみたいな代物である。そんなものでも殴り続ければいつかは気絶するだろう。だが、必ず一発で沈められるとは限らない、というか一発で気絶とか無理である。

それならもう遠距離でボウガン担いで軍隊ごっこしようぜという話になるのだが、この世界に携帯式の大砲の類は存在しない。ボウガ

ンという文字通り、その威力は弩なのである。弓と大差ないそれを見て小太郎は採用を見送った。榴弾やら竜撃弾という強力な弾はあるものの、モンスターを一撃粉碎可能かと言われるか否である。後者に至っては接射しなければ意味がないという、それ遠距離武器の意味なのでと小太郎は憤慨した。私は後方から安全に狩りたいのだ、と。

そこまで考えた時点で小太郎の選択肢は一つに絞られた——結局選択したのはガンランスである。

モンスターを狩猟するならば短期決戦でなければならぬ。此方は敵の攻撃を真面に一撃受けければ即死であり、暴れまわる台風に近付きたいとは思わない。しかし、どうせ近づかなければならぬのなら目指すは一撃必殺、それを為せるのはガンランスのみであると確信していた。

そうして出来上がった戦闘スタイルは——「片手ガンランス」

そもそも体格差からしてワンダと巨像並みの差がある訳で、そんな怪物の攻撃を盾で防ぐなどナンセンス。下手をすると足か腕が飛ぶ。片手剣の盾で受けているハンターは恐らく新人類か何かだと腹の底から信じていた。少なくとも小太郎には出来ない。

ランスやガンランスを扱うハンターは例外なく動きが遅いが、あれは盾が阿呆の様に重いからであり、ランス単体であれば昆虫棍や太刀より僅かに重い程度。それならば常時走る事も可能。防御は出来なくなるものの、そもそも防いだ時点で腕がへし折れると考えれば寧ろ此方が正解である。というかあんなクソ重い盾を担いでマラソンしたくないというのが本音。

それで、どう戦うかと云えば。

——ぶっ刺して、竜撃砲。

これのみである。

そもそも他のハンターが竜撃砲をモンスターにぶっ刺して使わない事に疑問を覚える。硬い外皮の上から砲撃を叩きこむより、内臓に刃をぶっ刺した状態で砲撃した方が致命傷を与えられる筈である。これを喉、眼球辺りにでもぶち込めれば勝利確定。外皮の薄い関節に

差し込めれば四肢を奪えるのでどちらにせよ優勢。

やったよハンター、ダブルピースである。

この着想を得た時点で鍛冶屋のおっちゃん事ハモンさんに頼み込み、矛先は異様に硬く鋭く、しかし機構は単純に。通常の砲撃機構を撤廃し竜撃砲のみを使用する「通常型」や「放射型」、「拡散型」とも異なる『特射型』が完成した。

本来竜撃砲は砲弾を使用しないが、このガンランスに於いては一発の威力を高める為に装填可能な様に設計。更に竜撃砲後、第二射を早く行えるよう冷却機構を増設。通常のガンランスであれば一窓の所、砲身周りを囲むように四つ配置。更には砲撃時の熱波、万が一の跳弾を防ぐべく持ち手周りにトリガーを握りこむと展開する展開小盾を取り付けた。これに関してはヘヴィボウガンのシールドを剥がして取り付けたので、それ程手間は掛かっていない。尚、竜撃杭の方は通常通りに使用出来る。万が一小太郎の膂力で突破できない肌を持つモンスターが現れた場合、杭を打ち込み表面を削った後刃を差し込んで竜撃砲を撃ち込むのである。

そうして出来上がった世界に一つだけのガンランス。それを見て小太郎は、「そうそう、こういうので良いのだよ、こういうので」と満足気であった。

因みに銘を【堅揚げポテト】と云う。

どんなに堅い外皮を持っていようと、揚げポテトの様にホツカホツカにしてやるという意気込みが込められている。

因みにこの武装、大型相手には凄まじい効果を発揮するものの、小型モンスター相手には討伐効率が著しく下がる模様。

当たり前である。

きびしいせかい。

■

時折、里の外に出向くことがある。

大抵はギルドの依頼で、馬車や飛行艇を用いて移動する事になるのだが、其処で活動するハンターを見ていると酷く安心する。

モンスターにちまちま攻撃する、僅かに刻まれる傷。攻撃を鎧で受

け吹き飛ばされる。そのまま転がって、慌てて回復薬を飲み戦闘に復帰する。

そうそう、これこれ、この貧弱さこそ人間だ。

そういう人らしい狩りを見ると、小太郎の持つ何かがとても満たされるのだ。恐らく人間と云う種に対する疑念だとか、自尊心だとか、そういうものだ。小太郎は思った。里に所属するハンターは皆異常だ。否、ハンターではなく里人というべきか。全員が最低でも下級ハンター並みの実力を持ち、中には上位級のモンスターでも撃退可能な実力を持つ里人が居る。

軒先でお茶を飲みながら、「今日も良い天気ねえ」なんて呟く御婆ちゃんや百竜夜行では大剣片手に、「往生せえやアアア」なんて叫びながら落下斬りをキメた場面を見た日以降、小太郎は里人全員に腰が低くなった。当然である、誰だって死にたくないのだ。

更に言えばカムラの里で起こる災害、百竜夜行は一匹討伐するのに多大な労力を要する大型モンスターが文字通り列を成してやってくるというもので、カムラの里以外では是が起れば壊滅確定という、「何でこんな所に里建てたの?」と思う程の代物。

そのの悉くを退けて来た小太郎は、数年もすると段々感覚が麻痺してきた——「あれ、討伐依頼一匹だけ? 十匹とか二十匹とかじゃないの?」と発言するまでに至った。尚これは里外のギルドでの出来事であり、その発言を受けた受付嬢はドン引きした。

以降小太郎は、最低二匹から三匹、可能であれば四匹程度のモンスターを同時狩猟する『地域掃討狩猟』という任務を良く受注している。これは補給も限られ連戦となるので難度が高く、特にパーティ前提で行われる任務である為、上位ハンターの中でも一握りの者に発注される。

因みに小太郎は外征を行う仲間ハンターが居ないため、専らアイルーとガルクを引き連れて狩猟している。実質ソロである。これを小太郎に面と向かって云うと、「いや二匹とも俺の友達だし、仲間だし、ソロじゃねえし」と早口で呟く。

尤も、その地域掃討狩猟自体そうそう発注される事がなく、小太郎

も此処暫くは里の任務だけを回している安穩——訓練から目を逸らしつつ——とした生活を送っていたのだが。

「カムラの里、風魔小太郎殿に指名依頼です」

先日、里より少しばかり離れた場所での掃討依頼がギルドより発注された。

■ 「お前が例の……カムラつつう田舎から来たハンター？」

「ちよつと、何でそんな喧嘩腰なの」

「ああ、いや、悪い、他意はねえんだ」

「……………」

ギルド馬車に揺られてやって来たベースキャンプ、其処には先客が居り各々武器を抱えた状態で休んでいた。一人は弓使いの女性、もう一人は太刀使いの男性である。二人の視線はキャンプに入って来た小太郎に向いており、小太郎は視線を切ると小さく頷きながら、「風魔小太郎」と告げた。

「ああ、名前は知っている、フォーマって名前は結構知られているしな」
「カムラの里と云うと踏鞴場が有名よね、鉄を扱わせると一級品なのよ」

「へえ、というか響きからすると……ユクモの方が？」

「アンタ、ユクモは知っているのにカムラは知らないの？」

「ユクモ村は、ほら、温泉に入りに行った事があって」

小さく笑いながら告げる男性、女性の方は肩を竦めている。小太郎は二人を眺めながら思った、誰だこいつらと。

いや恐らく雰囲氣的にこの依頼を受注したハンターなのだろう。今回はドッグとキャットが諸事情で連れて来られなかった為、本当にソロで狩猟する事になっていたのだが——ギルド側が保険として雇ったのだろうか？ 小太郎は近場の敷物に腰を下ろし、ガンランスの調子確かめながら問い掛けた。

「今回の依頼は単独だと思っていたけれど、違ったのか」

「ええ、ごめんなさい直前になって、丁度近場で仕事があったの、それで帰還する時にギルドから掃討依頼が舞い込んで来て……………」

「どうせならって受けた訳だ、件の『爆槍使い』も見て見たかったし、丁度良かった、手本にさせて貰うぜ」

男の視線が小太郎の持つランスに向けられた。通常のそれと比較すれば一回り大きく、取っ手にシールドの増設された代物。外装から内部機構を伺い知る事は出来ないが、既製品と異なるという事は見る者が見れば分かる。

視線を切った男は膝を叩き、太刀を担いで告げる。

「さて、それじゃあ揃った事だし……一狩り行きますか！」

「ええ！」

「……」

何気に、こうやって他のハンターと協力するのは久々かもしれない。小太郎は内心で心臓をときめかせ乍ら強く思った。

上手くいけば、外征用のパーティとか組めるかもしれない——なんて。

■ 「しつ、居たよ——目標のリオレウスだ」

森林地帯、丘と森、そして崖で構成されたフィールドは酷く高低差がある。しかし障害物が多く物陰の多い場所は身を隠すのに適している為一長一短。目標に気取られず、静かに一撃を加える事を考えれば悪くない条件であった。

小太郎達は森林の高台に陣取り、索敵を始める。そして数分と経たずに目標であるモンスターを発見し、声を潜める。

「あっち、丘の方にはアンジヤナフが居る」

「それでもって、森林を抜けた平地にはティガレックス……やばいな、結構固まっているぞ、どれか一匹に手を出して縄張り争いを誘発させるか？」

「失敗したら全員のヘイトを買って大惨事ね、此処は安全策で一匹ずつ釣り出すのが定石だと思うのだけれど——小太郎？」

小太郎は二人の会話を他所に、ガンランスへ弾薬を装填していた。手元に複数存在する引き金の具合を確かめ、問題ないことを確認。脳内では既に狩猟の算段が付いている、いつも通りだ。

つまり——近い頃から狩猟する。

そこまで考え、「ああ、そういえば今回はソロではないのだ」と思い出し、徐に小太郎は一番近いリオレウスを指差した。丁度三匹視界に見えるのだから、ひとり一匹担当で良いだろうと、そう思つて。カムラの里で百竜夜行を防ぐ時もそうだ。一匹に付きハンターが一人張り付き、狩り終わつた順に他と合流する。頭カムラだからこそ出来る事、尚出来ない場合モンスターに轢き殺される模様。手慣れたものだった。

「俺はリオレウスを狩るから、終わつた順に合流で——それじゃあまた後でね」

「え?」

「は?」

云うや否や、小太郎は虚空に導虫を投げ飛ばし糸を手繰る。宙を舞つた小太郎は落下地点で屯するリオレウスを目視しながら、自由落下を開始した。カムラの里に生まれた人間は、一キロ下の奈落到落下しても平然と着地する真正銘の化け物である。しかし、残念ながら小太郎は百メートル下に落下するだけで致命傷を負いかねない。故に落下中に二匹目の翔蟲を真上に飛ばし、減速。

——翔蟲は音がしない、少なくともモンスターからすれば羽虫の音、取るに足らない弱者の音。

実際、リオレウスは警戒の様子を見せない。大翼が風を裂く音もないのだ、何たる僥倖。不意打ちを決められる事など早々ないが故に、小太郎は歓喜した。

リオレウスの上面を、目を凝らして注視する。生え揃う鱗、あれを貫くのは中々に骨が折れる。半面、腹や翼、足には鱗が疎ら。狙うなら其処であると決めた。

初手——手元へと帰還した一匹目の翔蟲を、リオレウスの尻尾に張り付ける。その感触に、ピクリとリオレウスの尻尾が揺れた。ガンランスの引き金を引き絞り、砲身が火を噴き始める。

二手——尻尾に張り付けた翔蟲より糸を手繰り寄せ、ブランコの要領で空中からリオレウスの股下に潜り込む。此処でリオレウスが異

変に気付き、頸を動かす。ガンランスの駆動音を拾ったのだ。

三手——漕いだ勢いそのままに、ガンランスをリオレウスの腹に打ち込む。里で鍛えた怪力と慣性、そして異様な鋭さを誇る矛先が柔い腹を食い破った。

トリガー、そして。

——爆散。

食い込んだ刃先、砲身から炎が逆流し散弾銃の如く鉛が臓物を食い散らかす。ズタズタになった臓物を、凄まじい炎が焼き焦がし、反動で流れた炎は手元の装甲で防ぐ。竜撃砲の反動で地面に転がった小太郎はすぐさま立ち上がり、冷却機構を作動させながらリオレウスより距離を取る。

腹の中に竜撃砲を叩き込まれたリオレウスは膝を折り、咆哮を放ちながらゆっくりとその巨体を地面に沈める。地面が揺れ、土埃が舞った。

慣れた手付きで複数ある引き金を引き、薬室の空薬莖を排出、腰に備え付けていたベルトから弾薬を取り出して装填。スライドを引き、腰を落としたまま待機。

そのまま一秒、二秒、三秒——十秒、待つ。

甲高い音、ガンランスの冷却窓が閉まる音。第二射可能の合図と共に小太郎は倒れ伏したまま微動だにしないリオレウスに近づく。頭部を覗き込めば瞼は開いたまま、その舌は投げ出され既に絶命している様に見えた。念の為に、小太郎は苦無を足のホルスターから一本抜き放ち、リオレウスの目玉に投擲。生きているのならば、打点をずらす、避ける。瞳孔の収縮、或いは反射的に何かしらの行動が起こる。しかしリオレウスは微動だにせず、苦無は眼球に突き刺さり中程まで埋まった。

そこまでして漸く小太郎はリオレウスの討伐完了を確信する。

「……奇襲、最高」

「こうも簡単に一匹を屠れるとは、小太郎は歓喜に打ち震える胸を撫でながら深く息を吐く。本当ならば暴れ狂うモンスターの間隙を縫って突き刺さなければならぬ一撃、それをこうも容易く。やはり

忍者は最高だ、胸の中で喝采を挙げながら振り向くと——此方を唾然とした表情で見下ろす二人のハンターと目が合った。

何故二人共、各自の目標と戦っていないのだろうか。

そんな疑問が沸き上がる。そして二人が狩猟に向かっているのになると——静かに、小太郎は視線を先ほど二匹のモンスターが居た方向へ向ける。

丁度、此方に向かってくるアンジヤナフとティガレックスが見えた。

成程、それはそうなるだろう。小太郎は納得する。死に際にリオレウスは咆哮していたし、何ならガンランスの竜撃砲は遠方に居ても良く響く。三人が順次相手をして、早く狩り終えた者が他の助力に向かう。これはそういうやり方だ。

もし、二人が目標二匹のヘイトを買っていないかったのなら。

——勿論、全てのヘイトが小太郎に向く。

「お、ふあつくー！」

叫び、小太郎はその場から全力で飛び上がった。その足元を樹々を薙ぎ倒し、ティガレックスが小太郎を食い殺そうと頭から突っ込み、歯先が掠った。咄嗟に翔蟲を投げ、遠方へと着地する。その間に奥に見えるアンジヤナフの位置を探る——二対一は流石に不利、というよりやりたくない。最適解は最速で目の前のティガレックスを撃ち殺し、後続のアンジヤナフに注力する事。

そうなのだが——。

「こいつ本当に嫌いッ！」

頸を左右に振り回し、両手で大地を叩きながら不規則に前進するティガレックスを前に思わず叫んだ。動きが荒々しい上に読めない、更に力強いし素早い。幸いなのは外皮がそれ程硬くない事か。しかし、だとしても打ち込む隙無ければ意味のない話。

「お前らアアア早く来いイイイ！ どうなっても知らんぞオオオオ！」

「ご、ごめんなさい、直ぐに行くわッ！」

「わ、ワライ！」

小太郎が魂の叫びを轟かせれば、二人は慌てて鳶を伝つて降下を始める。何故翔蟲を使わないのか？ そう考え、即座に「そういえば翔蟲ってカムラの里のハンターしか使えないじゃん」と納得する。成程、そもそも初手奇襲の時点から無理があったのだ。自分の阿呆、小太郎は涙目になった。

「クソツタレがア！」

両手を掻くようにして小太郎を叩き潰そうとするティガレックス、その攻撃を掻い潜りながら小太郎はガンランスを脇に挟む。由緒正しい竜撃砲の構え、既に放熱を始めていた砲身は一秒と経たずに炸裂、散弾を発射、同時に爆音を轟かせる。熱波が小太郎の頬を焼き、足元の土が弾けた。

目前で散弾と熱の雨に打たれたティガレックスは咄嗟に顔を逸らし、上空に向かつて悲鳴を上げる。散弾が一発でも目に命中すれば儲けもの、そうでなくとも隙を作れたのなら十分。顔を上空に向けたティガレックス、その顔面からは蒸気が吹きあがっている——目前には隙だらけの頸元。

冷却機構が作動し窓が勢い良く開いた。もう竜撃砲は撃てない。しかし二歩、駆けるようにして踏み込む。そしてガンランスを突き出し、トリガー。狙いは頸、そして奇妙な動作音と共に刃がティガレックスの頸に食い込み、螺旋状の杭が外皮を突き破って内側に侵入した。

杭が肉に食い込んだ事を確認し、素早く後退。同時にティガレックスが痛みに藻掻き、暴れまわる。地面に爪痕が残り、土が宙を舞っている。小太郎の額から冷汗が滲んだ。

竜撃杭は中程まで捻じれ進むと——爆散。

鋼鉄の破片を撒き散らしながら自壊する。流石に竜撃砲のそれと比較すれば規模は小さいものの、効果は確かである。傷口から大量の血が溢れ、ティガレックスが咆哮と共に血を吐き出した。頸に命中したのが良かった、致命傷だ、そう確信する。

後退しながら竜撃砲と竜撃杭両方のリロード。弾薬は腰のベルト、杭は背中から抜き出す。そこまでして漸く二人のハンターが到着、そ

して同時にアンジヤナフも到着。

「遅くなつて悪いッ！ 本当にスマン！」

「それで、ど、どうするの!? 作戦とかある!? 結構ヤバくない!?」

「何がヤバい!? 此方は三人、向こうは二匹！ 数で圧殺！ 以上！

全然つヤバくない！」

「さつきも思つただのだけれど、アンタ結構頭がヤバいわよ!?」

「だからヤバくないつて云つているでしょおおアア!?」

アンジヤナフが飛び上がり、三人はそれぞれ別方向へと回避する。ティガレックスは未だに血を流し、荒い呼吸を繰り返している。攻め時であった。

「太刀の野郎！」

「俺か！ 何だッ!?」

「アンジヤナフに突つ込めッ！」

「りようか——エツ？」

「囧になれつて云つているんだよオオオオ！」

駆け回りながら叫ぶ。頭上をアンジヤナフの尻尾が掠め、思わず心臓が跳ねる。直撃すれば骨の一本二本では済まないだろう。頭部に貫えば頸椎事引っこ抜かれかねない。早々に二対三を崩す必要があった。瀕死のティガレックスを狩猟し一対三に持ち込む、現状を切り抜けるにはそれしかない。その間、このアンジヤナフのヘイトを買う人員が必要だった。

「いやいや、無策で突つ込むとか死んじまうよ!?」

「閃光玉、閃光玉持っていないの!? 隙を作れば良いのでしょうか!?」

「そんな嵩張る道具持つてくるものかッ！」

「アンタ本当にハンターッ!?」

「あつた！ 閃光玉、あつたよッ！」

女の言葉に慌ててポーチを探っていた男が拳大の球体を取り出し、掲げた。尚、小太郎は積載量の問題で狩猟道具は必要最低限しか持ち込んでいない。ガンランス用の杭と弾薬がポーチを圧迫しているのだ。それに重量が重すぎると、今度は翔蟲が耐えられなくなる。防御という選択肢を捨てている以上、身軽さの確保は必須であった。

「でかしたッ！」

「投げて！ ほら、早くッ！」

「目エ閉じてろッ！ おらア！」

叫び、閃光玉を投擲する男性。閃光玉は丁度三人とアンジヤナフの中間地点で地面に叩きつけられ、三人は次の瞬間にも飛来であろう強烈な閃光に備え腕で顔を覆った。

しかし、待てども待てども光が放たれる事はなく。

数秒経過してやって来たのは、強烈な臭いであった。

「コレうんここやし玉じゃねえかよおオ！」

「ゲホッ、くっさ……！ ちよ、やだあ……！」

「うおオッ!? 間違ったアア!？」

閃光玉ではなくこやし玉をぶん投げたらしい。鼻をつく嫌な臭い、涙が出る程酷い臭いだと思った。小太郎達は暫く余りの悪臭に立ち竦み、そしてアンジヤナフも思わず怯む。まさかババコンガではあるまいし、うんこを投擲してくるとは考えていなかったようだ。心なしかアンジヤナフの瞳が、「うわ汚なッ！ マジかよこの人間」という感情を湛えている様な気がした。

しかし、隙は隙、怯みは怯み。閃光玉を投げて怯もうと、うんこを投げて怯もうと、生じる結果は同じである。小太郎はこやし玉の煙を裂きながら飛び出し、未だに立ち直っていないティガレックスに躍り掛かった。

「シャオラアッ！」

裂帛一閃、血を流しながらも何とか飛びずさろうとしたティガレックスに向けて苦無を投擲。顔面に飛来したそれを咄嗟に腕で弾く、その隙に再び喉元へと潜り込んだ小太郎は今度こそ竜撃砲を撃ち込むべく、竜撃杭によって抉られた傷口に切っ先を抉り込んだ。

「吹き飛べッ！」

トリガー、爆発。

夥しい血と骨の碎ける音、爆炎が骨と肉を消し飛ばし、肉が焦げる臭いと共にティガレックスの頸が宙を舞う。杭によって裂かれた喉元は脆くなっており、竜撃砲で胴と頭が寸断されたらしい。弾け飛ん

だ頭部は切断面より赤を撒き散らし、重々しい音と共に地面に転がる。全身に返り血を浴び、竜撃砲の反動で地面を滑った小太郎は素早くリロードを行う。ガンランスを切り返し、遠心力を利用して薬室の空薬莖を排出、同時に手に握り込んでいた弾薬を親指で弾き装填。文字通り片手間で弾薬の装填を終えた小太郎は、後方で咆哮を繰り返すアンジヤナフを見る。

「うおオオッ！ こつちを見ろおオオッ！」

「目が、痛いよお！」

「ウルセエ！ 痛かろうと何だろうと矢を射るんだよ！」

小太郎がテイガレックスを狩猟する間、二人のハンターはこやし玉に目と鼻を潰されながら必死にアンジヤナフの気を引こうと奮闘していた。男性側が必死にアンジヤナフの足元を走り回り、女性側が弓で顔面を射る。対象の注意を削ぎ、安全マージンを取りながら堅実に狩猟を行うやり方であった。小太郎はそれを見て思う、ああ、ハンターしているなあと。

「二閃ッ！」

男が叫び、太刀を肩に担いだ状態から半円を描いて振り抜く。物打ちは確かにアンジヤナフの足を捉え僅かに鮮血が舞った——しかし、刻まれた傷は浅く致命とは程遠い。残心を解かず、傷を見た男が思わず顔を顰める。確かに手応えはあった筈だと、男は柄を強く握ったまま後方へと飛び退く。

「か、硬エ……！ あの手応えでか、流石に嘘だろッ！」

「アンジヤナフの足は硬い、部位破壊を——ねえ見間違いかな、その太刀下位武器に見えるのだけれど？」

「スマン！ 俺達ッ、昨日上位に入ったばかりなんだッ！」

「何で此処に居るの??？」

小太郎は心の底から疑問に思った。おかしい、地域掃討任務は上位ハンターの一握りの存在しか任せられない代物ではなかったのか。それとも何かの偶然か手違いで彼らに任務が渡ってしまっただけなのか。手違いで難度七任務って何だ、勇者の御宅に手紙を書いたら隣の家の一般人に渡って、勇者ではなく中年のオッサンが魔王討伐の旅

に出る様なものだぞ。馬鹿にしているのか。

それともあれか、強い奴と一緒にクエスト行ってくれるのなら別に自分が弱くても何とかしてくれるだろうという他力本願な思考で此処に来たのか。ぶっ殺すぞ。

そんな思考が漏れたのか、涙目になった目を擦りながら女性が弁明を口にした。

「ギ、ギルドも流石に単独で掃討任務は危険だと判断しているのよ、貴方が現地入りする間に任務受けられる場所に居たのが私達だけで、本当なら貴方もオトモのイルーとガルクがいつも居るのでしょうか？ 今回も付いて来るものとギルドも思っていたみたいだし、そう思っただけで馬車を派遣したら本当に一人で任務を受ける様子だったから、慌てて私たちに依頼を……」

「いや、確かにイルーとガルクが居るからソロじゃないとは云っていただけでも」

だからと云って下級上がりたての中堅を掃討任務にぶち込むだろうか。いや、本当に切羽詰まっております他に人員が居なかつたとも思える。単独で挑まれるよりは百倍良いという判断だったのだとしたら余計質が悪い。

足を浅く斬られたアンジヤナフが鼻息荒く片足を振り抜く。「うお!?!」と悲鳴を上げながら地面を転がり蹴りを避けた男は太刀を構え直し、小太郎を見た。

「本当に悪い！ けれど俺達にもハンターの意地がある、形振り構わず動きを止めるからその隙に一撃頼む！」

「……まあ、色々言いたい事とか思う所はあるけれど、そんな事を云っている場合でも場所でもないし——分かったよ！」

ガンランスの矛先をアンジヤナフに向け、頷く。

同時、冷却を行っていた四窓が閉じ砲身に火が入った。男が太刀を肩に担ぎ、背後に声を掛ける。

「竜の一矢、行けそうか？」

「っ……漸く目が見えて来た所よッ！」

尻尻を伝う涙をそのままに、女は腰から一本の矢を抜き放った。鏃

に奇妙な機構が備え付けられた一本矢、小太郎がそれを見えればガンランスの竜撃杭に酷似している事に気付いただろう。女が地面に擦り付けるようにして矢を番えれば、火花を散らした鍬が回転を始める。それは工房の作り出した、『貫通』に特化した特殊矢。瓶による矢の強化ではなく、矢そのものに手を加えた貴重な一本である。

「ッ——練気」

男は太刀の刀身に掌を這わせる。鋭い刃は簡単に皮膚を裂き、男の手から血が滴った。傍から見れば只の自傷行為、しかし太刀使いからすればそうではない。太刀は、血の滑りによつて鋭さを増す。敵を斬れば斬る程、屠れば屠る程、その刃の輝きは増し技は冴えを見せる。

極論——それは敵の血でなくとも構わない。

「往くぞッ……！」

「——矢ッ！」

膝を着き、衝撃が空気を揺らす。火薬の弾ける音、同時に弦が弾ける音が響いた。女の放った一矢がアンジヤナフに襲い掛かる。通常の矢であれば容易く避けられた、しかし身構えたアンジヤナフに飛来したそれは通常より遥かに速く、辛うじて身を振り、頭部への着弾を躲す事が限界であった。

矢は、アンジヤナフの横腹に突き刺さる。鍬が肉を裂き、内側へと突き刺さったのが分かった。痛手だ、しかし致命的ではない。そう思考したアンジヤナフが——次の瞬間、それが絶対に受けてはならない矢であると知った。

ズン、と何か腹の中で弾けた。それは衝撃となつてアンジヤナフの肉体を揺らし、思わず体が折れ曲がる。何だと己の肉体を見れば、突き刺さった矢が先ほどより深く、中へと沈んでいた。

【二段加速】——矢が対象に突き刺さった瞬間、回転する鍬に備え付けられた小型の推進器が火を噴く。結果、宛ら小さな爆発を起こし矢がもう一段、僅かに挟り込む。外皮で止まれば外皮を穿ち、骨で止まれば骨を穿つ。これは、そういう矢であった。

「シィッ！」

体勢を崩したアンジヤナフ、その懐に男は入り込んでいた。しかし

隙とは云え僅かなもの、技を差し込むような隙間はない。ガンランスであれば突き刺し、点火、爆破の手順が必要となる。占めて三秒、このアンジヤナフが全く動けない状況を作り出す必要があった。

迫る男に向けて、体勢を崩しながらアンジヤナフが大口を開ける。尾も足も振るえない、しかし口一つあれば十分だと云わんばかり。しかし男は避ける素振りすら見せず、迫るアンジヤナフに向け手を素早く振る。何かを投げた訳ではない、だが男の手から赤い雫がアンジヤナフの眼球目掛けて飛び散った。びしやりと、アンジヤナフの片目が赤く染まる。半身になった男の直ぐ横を、鋭い牙が抉り取った。目測を誤った、そうアンジヤナフが思考するより早く、己の頸を誰かが蹴ったのが分かった。

——技でも斬れず、力でも斬れず、それならば。

蹴られた方向——血に染まった視界をそのままに、アンジヤナフは勢いよく噛み付く。しかし、何の歯応えも味もなく、ただ虚空があるばかり。

あの、長物の男はどこに——一瞬生まれた空白の時間。

刃は、上から降って来た。

「ツェアアツー！」

狙いは眼球、赤く染まったそれ。外皮が斬れぬのならば柔い部位を斬る。頭上より飛来したそれは寸分違わずアンジヤナフの片目を捉え、鋭い斬撃音と共に視界を潰した。例え技で斬れぬとも自重と重力、落下の勢いを乗せた刃ならばと勇み、見事刃は届いた。痛みの余り絶叫するアンジヤナフ、着地と同時に地面に転がった男は笑みを湛え乍ら確信する。

「——鉄糸」

アンジヤナフの動きが不自然に停止する。片目を潰され、その場で地団駄を踏んでいた両足が不意に折れた。見れば、その巨軀のあらゆる場所から糸が繋がっている。背中から、頸から、尻尾から——地面へ、まるで縫い付ける様に。

アンジヤナフは微塵も動かせなくなった首を震わせ、残った視界で迫る影を見る。

「これだけ時間があれば、余裕だ」

己の眼球に向け矛先を振り上げる、小太郎の姿が映った。

「いやあ、マジ、本当に助かった、流石は上位だわ、パネエわ」

「やばい殺意が溢れそう」

「……アナタ、狩猟の最中と普段で大分性格変わるわね」

「狩猟の最中はアドレナリン溢れまくってそれ所じゃないのだよ」

「アド……何？」

頭部の吹き飛んだアンジヤナフを前にしてへたり込んだ男と女、小太郎は熱したガンランスの薬室から空薬莖を弾き、内心でギルドに対する恨み辛みを吐き出していた。

「ああクソ、やっぱり上位となると全然モンスターが強さが違うな……多少は腕に覚えがあったのに、まるで歯が立たなかった」

「想像はしていたけれど、想像以上だったわ」

「何故それで掃討を受けるのか」

「だから悪かったって」

「今度、何か奢ってあげるから許して頂戴」

「……まあ、仔細を聞かずに参加したのは俺の責任だ」

ギルドから依頼が来て、まあ一人でも行けるでしょうと勝手に判断して狩場に来たのだ。完全ソロであるという情報を直前で出した此方にも非があると小太郎は思った。

「それでよお、そのお、風魔の旦那？」

不意に、擦り寄って来る男。その逆三日月になった瞳が不気味だ。小太郎はガンランスを抱えたまま僅かに仰け反った。

「これからも良かったら一緒にクエストなんか……」

「いやいや分かってるって、流石に今の俺達の腕じゃ足手纏いだ、それは重々承知しているとも、けれど俺だっていつまでもこのままでいるつもりはねえ、これは……所謂、先行投資って奴だ！」

小太郎が虫けらを見る様な瞳で男を見下ろした為、慌てて言葉を続けた。現上位ハンター、しかし下位から足抜けしたばかり。戦力とし

て見るならば足手纏い以外の何物でもない。先行投資とは云うものの自分が彼らの面倒を見てやる義理はないのだ。

しかし、そもそも碌にパーティを組んだこともない様な自分が選べる立場なのだろうか？ ふと、小太郎はそう思った。思い出すのはギルドに入った途端、自分を見る視線の数々。そこには友愛や尊敬の念など一つとして存在せず、何か訳のわからないものを見る視線だけがあった。「いやあ、上位ハンターになったらモテモテかな？ 云い寄られちゃうかな？ 困っちゃうなあ」などと云って天狗になっていた頃を思い出して小太郎は何だか無性に死にたくなつた。

「お前もそう思うだろう？ な！」

「……まあ、私もベテランと云うか、上位依頼に慣れたメンバーがパーティに居ると心強いと思っっているけれど」

男の言葉におずおずと同調する様に女も頷く。小太郎は努めて表情を動かさないように注意しながら脳内で思考を纏めた。どうせ自分には組むべきメンバーなど存在しない、里内ならば兎も角外征でパーティを組めるといふのは大きい。報酬は——人数分で割られてしまうが、将来的に見れば受けられるクエストの幅も増えるし決して悪い話ではない。彼の云う通り、先行投資という奴であろう。

数秒、小太郎は目を瞑ってあらゆる感情を飲み下し、ゆっくりと首を縦に振った。

「……分かった」

「やрийい！ 云ってみるモンだぜー」

男が拳を突き上げ、背後の女が胸を撫で下ろす。

まあ、悪い様にはならないだろう。こんな風に喜んでくれるのなら、力を貸すのも吝かではない。その後の事を考えれば。

小太郎はそんな風に目の前の光景を眺めていた。

■

「……あれが例の狩人か」

ベースキャンプに帰還し、それぞれの帰路に付く頃。小太郎が去っていくその背中を見つめながら、先程まで能天気な笑みを張り付けていた男の表情が豹変した。その身に纏う下位装備に似合わぬ武威、そ

して瞳の鋭さ。先ほどの軽薄な態度とは一転、どこまでも冷徹で酷薄な雰囲気纏う彼を先の男と同一人物と気付ける者はどれ程いるか。

男は背負った太刀を地面に放りながら、背後の女に問うた。

「どう見る、アレイアード」

「確かに戦闘能力は驚異的ね、『歴代』のイレギュラーと比較しても色褪せない、ロンディーネからの報告が本当なら、あの実力も納得……彼で決まりだと思うわ——通例であれば、ね」

「お前もそう思うか」

「ええ、戦闘能力は頭抜けている、他の狩人と比較しても比類なき才能、それもまだ伸び代を残している、歴代の中でも上位、恐ろしさすら感じるわ、でも……【彼女】程ではない」

アレイアードと呼ばれた女性は、呟きながら籠手や具足を脱ぎ散らかしていく。途端、どこから現れたのか複数のアイルー達がキャンプを囲みだし、彼ら本来の武器を手配し始める。

密偵——スパイと言い換えても良い。

ロンディーネが騎士を名乗るのであれば、彼らは草を名乗るだろう。表側と裏側、身分を偽り己を偽り、時には性格や名前すら変えて情報を収集する影役。ロンディーネが里を探るように、彼らは里の『特定のハンター』を探る密命を受けていた。広域に支部を持つハンターギルドだからこそ地域別に国や里による影響力というものが存在する。得てして組織が大きければ大きい程、その手の物には縛られるものだ。特に彼らの背後にある王国は、有形無形の支援をギルドに齎す巨大国家。出資金の割合によって影響力が変わるように、組織の上層が特定の出身者に限られるように——権力とは『そういう風に』形作られている。

不意の任務にハンターの一人や二人を捻じ込むなど訳ない事であった。

そして今回抜擢されたのが此処に居る二人であり、対象は他ならぬ小太郎であった。

「何の因果か、あれ程の才能を持った狩人が同じ里で育つか……いや、

あの里だからと云うべきなのか」

「彼の生まれた地はまだ見つかっていないのでしょうか？」

「ああ、捨て子である事は確かだが、情報部も仔細までは掴んでいないらしい、異常個体イレギュラーが二人、嘗て存在しなかった事だ、俺達はこのまま監視を続けるぞ」

「ええ、了解よ、今回の件はロンディーネにも伝えておくわ……全く、カムラという里は魔窟ね、鑄造技術と云い、住んでいる里人と云い」

男——アレスもアレイアードの言葉に内心で同意した。世界の片隅、山奥にひっそりと存在する小さな里がよもや此処までの技術と力を持っている等と誰が予想出来よう。大群を成して襲来するモンスターから身を守る為に、そういう風に進化したのか、或いは元々素質を持っていたのか。

しかし、その里に存在する一人の少女に光を見た——それもまた事実。

「風魔小太郎——彼女が期待するお前の力、見定めさせて貰うぞ」

■ 眩きは風に揺られ、誰の耳に届く事もなく消えた。

「小太郎、クエストお疲れ様でした……随分疲れた様子ですが？」

「……その、パーティのメンバーが少し、ね」

「は？ パーティ？ 今回はソロと云っていましたよね？ 私は何も聞いていないのですけれど??？」

「ひえッ……ち、違うのですミノトさん、何か、きつとギルドの方でござたが思ったと思うのですけれど、急にパーティを組んで討伐する事になって、ですね」

「へえ、そんな報告は受けておりませんが——分かりました、後でゴク様に尋ねてみましょう、きつと丁寧に全てを話してくれる筈です」

「あつ……」
「兎も角、クエストお疲れ様です、次の任務に備えて体を休めておいて下さい」

「あい……了解しました」

「ん、ああ、小太郎」

「はい？」

「もう一つ伝える事があったのを忘れていました、実はですね——香コウが帰って来ました」

「——は？」

貴方だけを見つめた結果

「もう直ぐか……」

「にやあ……旦那様、考え直した方が」

「いいや、これは俺の矜持プライドの問題だ、男はな——負けたままでは終われないんだよ」

修練場、巨大な蛙型傀儡の目前にて小太郎は呟く。右手にガンランスを、左手にプライドを握り締め、己にとつて唯一無二の存在を待ち続ける。絶対にやって来るといふ確信があった。前日も、前々日も、その前すらも——己たちは此処で鎬を削ったのだ。

足音がした、軽やかな——散歩の様な足取りだった。

「来たか」

言葉を零し、ガンランスを持ち上げる。脇に挟み、矛先を地面に向けてながら暗い洞窟を歩いて来る人物に目を向ける。影は小柄だ——ほんの百三十か、四十か、矮躯と云つて差し支えない。

右手に剣を、左手に盾を。腰まで伸びた髪を一つに縛り上げ、吹き抜けから差し込む日光に晒された彼女の顔は——憎たらしい程に笑顔だった。

「よお……二ヶ月ぶりだなあ」

告げ、ガンランスの矛先を彼女に向けた。

「……香ッ！」

「あはッ♡」

間髪入れずに突撃、地面を踏み砕いて迫る最速の刺突を、彼女は何でもないかの様に盾で上に弾いた。互いの視線が交わり、整った顔立ちが視界一杯に映る。しかし、片や満面の笑みを浮かべ、片や鉛を飲み下したが如く苦々しい表情。顔立ちは兎も角、表情は対照的であった。小太郎の黒と、香と呼ばれた少女の金が交差する。

「わあ、突然だね、お兄ちゃんつてば情熱的♡ 私の姿を見て我慢できなくなっちゃった？」

「はッ！ 我慢なんざ微塵も出来るかッ！ こちとらお前に叩きのめされたあの日から、今日までテメエを叩きのめす為に鍛えたんだから

なア！」

「嬉しいなあ、それって毎日香の事を想って過ごしてくれただよね♡ もしかして私達って相思相愛？」

「ぬかせエー！」

距離を取らず、一方的にガンランスを振り抜く小太郎。香が持つのは片手剣、盾と剣を合わせた小型の武装であり、リーチは小太郎に軍配が上がる。間合いの外から一方的に攻めに転じる小太郎の姿は傍から見れば少女を虐める青年の姿ではあるが——肝心の少女は一撃として被弾を許さない。

逸らす、弾く、いなす——矛先が上下左右にぬるりと行き先を失い、切っ先が届く事はない。常に矛先は天上か虚空を突く。小太郎が必死になればなる程、少女の笑顔は深まり余裕を見せた。

「よわよわお兄ちゃん、また私にやられたいのね？ 良いよ♡ 何回だって、何十回だって、何百回だって相手をしてあげる、お兄ちゃんが立ち上がる限りね♡」

「お生憎様だな、それだったら勝負が始まった瞬間から俺の勝ちは決まっている——何せ俺は、勝つまでやめない主義だからなア！」

小太郎は己を鼓舞する為に吼えた、それを力に変え全力での刺突を繰り返す。しかし——しかし、一向に崩せない。小さな盾がまるで岩石の如く、巨大な城壁の如く聳え立つ。その場から一步も動かず、まるで赤子の手をひねるかの様に。

ランスやガンランスの大盾を相手にしている訳でもないというのに、小太郎は悪態を吐いた。

「糞が、何で片手剣の盾がこんなに堅いんだッ!？」

「んー、お兄ちゃん相変わらず武器を持った状態で対人戦苦手みたいだね？」

強引に盾を崩そうと横薙ぎに払った一撃が、タイミングを合わせたシールドバッシュにて弾かれる。両手で支えるガンランスから伝わる凄まじい衝撃に、小太郎の体が後方へと後退った。体格には大きな隔たりがあった、しかし彼女の前では体格差など微塵も問題にはならない。

パレイされた小太郎は忌々し気に香を睨みつけながら再びガンランスを構える。

しかし、彼女は対照的に剣と盾を指先に引っ掛け——そのまま挑発する様に両手を広げた。その無防備な姿に、小太郎は眉を顰める。

「良いよ、素手で相手をしてあげる♡ 教官と素手での対人訓練は続けているのでしょうか？ ほら、お兄ちゃんもそんな使えない武器なんて捨てなよ」

「は、何を云ってやがる、長物と剣のリーチの差を誰が捨てるかって——」

「——えく、なに、お兄ちゃんもしかして怖いのお？」

ぴくりと、小太郎の肩が震えた。香は片手剣を地面に落としながら指先で口元を隠し、下から何う様に小太郎を見上げる。その瞳は三日月を描いていた。

「こんな年下の女の子に組み敷かれて、何も出来ずに負けちゃうのが怖いのかなあ？ あーあ、残念だなあ、でも仕方ないよね♡ お兄ちゃん、私に勝てた事なんて一回もないもんね♡ 怖気づいて逃げちゃっても仕方ないよ♡」

「デメエ……」

小太郎は激怒した——必ず、かのメスガキを分からせなければならぬと奮起した。

小太郎には女性が分からぬ。小太郎は村のハンターである。修練し、モンスターを狩って生きて来た。しかしメスガキに関しては、人一倍敏感であった。

「来なよお兄ちゃん、ガンランスなんて捨てて掛かって来なよ♡ それとも——本当に怖いのかな？」

「女郎オ——ぶっ殺してやるッ！」

ガンランスを放り投げた小太郎は拳を握り締め、そのまま恍惚とした笑みを浮かべる香へと躍り掛かった。

■

結論から言うと、ぶっ殺せませんでした。

「あはははッ、お兄ちゃんよわーい♡ ゃっ♡ ゃっ♡」

「ぐおおおおオオオツ……！」

戦闘時間凡そ二十秒、勇んで挑んだ徒手空拳は歯牙にもかけられず地面に沈んだ。ガンランスを手放しリーチを捨てたから負けたのか？ 否、恐らくあのまま挑んでいたとしても何も出来ず完封されたに違いない。それならばまだ彼女の云う様に素手での決闘の方が勝機があつた。己を押さえつける万力の様な圧力は、多少の技術差では埋められそうにない。

「お兄ちゃん、ギルドで頑張っているって聞いたよ、前の百竜夜行でも大活躍だったんだって？ 偉いねえ♡ 凄いねえ♡ 頭撫でてあげようか？」

「くっそがアー！ この、舐めやがってツ……！ メスガキめツ……分かせてやるツ……！」

「がんばれ♡ がんばれ♡」

腹と顎に強烈な一撃を貰い、そのままマウントを取られた小太郎は見下ろされ、好きな様に弄られる。抜け出そうにも両手足を鉄糸で固められてはどうしようもない。無様に足掻く小太郎を楽しそうに、或いは嬉しそうに見つめる彼女は指先で蟲糸を弾き乍ら告げた。

「その糸、ほんの少しお兄ちゃんが【本気】にならないと解けない強度で縛つてあるから、自由になりたかったら頑張れ♡ じゃあね、ばいばーい♡」

「ぐああああアアア！」

「にやあ……やっぱりこうなつたにやあ」

小太郎が地面に縫い付けられ足掻く姿を見せられるキヤットとドッグ。二匹は、「まあこうなるだろうと思つた」と呆れ半分、納得半分という様子。二人の戦闘とも云えぬ蹂躪を見ていた感想はいつも通り。そんな二匹に香は小太郎から降りるや否や近寄ると、キヤットの頭を撫でながら静かな声で告げた。

「お兄ちゃんの事お願いね、もし解けないようだったら助けてあげて、キヤット、ドッグ」

「にや、畏まりましたにや」

「バウツ」

先程とは毛色の異なる笑みで二人を見つめると、そのまま来た道に戻る。その背中を二匹はそつと見送った。

朱仁^{しゅじん} 香^{こう}。

カムラの里が誇る真正銘『最強』のハンター。あのウツシ教官をして、「ちよつと理解出来ない位に強い」と云わしめる怪物。その腕前を見込まれギルドに於いてあらゆる特別災害、古龍や特殊個体の討伐に駆り出される「G」の称号を持つ者。

故にこそ、彼女が生まれたこの里は『英雄の守る里』と呼ばれたのだ。

■ 小太郎を軽く捻って転がした香は、そのまま修練場を後にすると小太郎の住む家へと足を運んだ。道中気軽に声を掛けてくる里人、ギルドでは遠巻きに見られながら宛ら珍獣の様な扱いを受ける為、此処の人々との触れ合いは香にとって癒しだった。そして、前人未到の己に追いつかんと足掻く存在も。

手を振って笑顔で挨拶を交わしながら、慣れた手付きで戸口を潜る。見慣れた小太郎の家、小さい頃から何も変わっていない。微かに残る彼の香りを肺に取り込み、宛ら自宅の様に寛ぐヒノエとミノトが囲炉裏を囲んでいるのを見て、香は静かに框を跨いだ。

「ああ、香ちゃん、お帰りなさい」

「お帰りなさい、香」

「はい、只今戻りました、お姉ちゃん」

他人の家なのに「お帰りなさい」で正しいのだろうか？ 正しいのである。この三人に至っては小太郎の物は私の物、私の物は私の物と云って憚らない。下着だろうと食器だろうと布団だろうと自宅であろうと、彼の所有物ならば己の物同然。その理論で長年過ごして来た為に、身に馴染んだ習慣は相手に違和を抱かせない。恐らく小太郎がこの理論を聞けば、「そうかなあ」と酷く震えた声で疑問を呈するだろう。尚、聞き入れられるとは云っていない。

ヒノエとミノトに勧められるがまま、香は座布団の一つに腰を下ろす。背筋を伸ばして正座を見せる三人は容姿も相まって傍から見れ

ば眼福であろう。しかし全員、その瞳は昏く淀んでいた。

茶を啜っていたミノトは一息吐き、対面に坐した香を見る。

「相変わらずの様子ね、ギルドの方で報告は聞いていたけれど、こうして自分の目で見て安心したわ」

「そうねえ、少し背が伸びたかしら？」

「まあ、はい、多少ではあります」

「修練場で小太郎と組み手をしていたの？」

「……良く分かりましたね」

「張り切っていたもの、小太郎……それと」

不意に足を崩したミノトが、香の髪の毛の傍で鼻を鳴らし嗤った。

「微かに小太郎の匂いがするわ」

「汗は水で流した筈なのですけれど」

「小太郎の香りを私達が見落とす……いえ、嗅ぎ落す筈がありません」
「当然ね」

「流石お姉ちゃんです」

然も当然の如く宣う姉の姿に、香は深い敬意を覚えた。

「それで、小太郎の仕上がりはどうですか」

「上位としては破格の腕前かと、単独でも古龍や伝説級のモンスター相手に立ち向かえます、余程理不尽な相手か情報不足でもない限り落命する事はないでしょう——今の腕前であれば、お姉ちゃんであつても苦戦するかと」

「へえ……流石小太郎君ですね」

「まあ、相変わらず本気ではない様子ですが」

微かに肩を落とした香を見て、二人は顔を見合わせる。

その表情は何とも言い難い、難題を前にした人そのものであった。

「ナルハタタヒメとイブシマキヒコ以来ですか」

「はい、お兄ちゃんが鬼気迫る戦いを見せたのは、あの一戦が最後です」

「狩りに出たばかりの頃は、常に本気というか、鬼気迫る勢いを感じていたのだけれど」

「慢心は良くありません、いつ強大な敵が現れるかも分からないので

すから」

「そうね、その通りだわ……だからこそ、小太郎には常に本気を出して欲しいのだけれど」

三人は互いに顔を突き合わせながら溜息を吐く。風魔小太郎——彼のハンターとしての素質は本物であると、この三人は腹の底から確信していた。しかし、現状の彼には過去存在した『必死』とも云える熱意が存在しない。

襲来する百竜夜行、マガイマガドの討伐、ナルハタタヒメとイブシマキヒコの出現、そしてその撃退。その激動の中で、風魔小太郎という人間は確かに「本気」であった。後先考えぬ全力での狩猟、あらゆる手練手管を用い、己の全てを使い、オトモ一丸となって戦うあの姿。その熱に過去、香も心打たれたのだ。

しかしイブシマキヒコとナルハタタヒメの撃退以降、その様な死闘を見る事はなくなった。百竜夜行や掃討任務で危機に陥る事はあっても、『死線』は潜っていないと断言できる。どこか余裕がある、どこか手を抜いている、どこか樂觀視している——それを通すだけの実力があるのは、勿論否定出来ぬ事実ではあるが。

或いは、彼の古龍に並び立つだけの存在が現れるのならばと考え、香はミノトに問いかけた。

「そういえばお姉ちゃん、村周辺の生態系が乱れていると聞いたのですが」

「ああ、警邏から報告が上がっていましたね、ギルドの方にも寄せられた情報ですが私は小耳に挟んだ程度で……姉様？」

「そうねえ、確かに此処最近モンスターの活動が減って来ているわ」
ミノトの疑問に、ヒノエは肯定しながら茶を揺らした。里の警邏、及び調査はヒノエの管轄。当然ギルドとも情報のやり取りはあるものの、その伝達には多少の誤差がある。

「何かから逃げる様にモンスターが集まる」、逆に「唐突に縄張りを放棄して居なくなる」——風神と雷神を退けて以降、この手の異常は耳にしなかったのだけれど最近ほつぽつと報告が上がっているの」

「原因は」

香の言葉に、ヒノエは頭を振った。分かっているのなら既に対処班が出来ている。何も手を打っていないという事は、打つ必要がないのか、そもそも打つ事が出来ないのか。

ヒノエの答えを聞いた香は眉を顰め、静かに、しかし強い口調で告げた。

「……古龍位の主が現れたのかもしれませんが、百竜夜行の事もある、警戒は厳にするべきです」

「勿論、既に里長には報告済みよ」

「成程、最近ギルド側の依頼を断って欲しいと云っていたのはそういう事でしたか」

「ごめんねえ、ミノトには心配を掛けなくなかったから」

「姉様、私とて立派なハンターです、この里を守る責務もあります」

胸を張ってそう宣言するミノトに、ヒノエは内心で吐息を零す。本当ならば、この可愛い妹にも危険な事はして欲しくないのだ。

原則として百竜夜行が近い時期となると、一時的にカムラの里ではギルドの機能が停止する。里人が一丸となつて防衛に当たる為だった。それは今回の異常を『百竜夜行』と同程度——即ち里が総出で対処すべき問題と見据えたという事に他ならない。

「……まあ、分からない事を云々しても仕方ありません、新しい情報が齎されるまで待つべきでしょう、無論備えは必要でしょうが」

「ええ、その通りね」

「ところで香ちゃん」

「はい」

「小太郎君の籠絡は上手くいっているの？」

「——それは寧ろ私が聞きたいのですが」

香の鋭い視線が姉妹を射貫いた。

「私が里を離れている間、一体何をしていたのですか？ 次に私が里に戻って来た頃には調教され切ったお兄ちゃんが全裸で抱擁の一つでもかましてくれるものかと期待したのですが」

「そうは云っても中々小太郎君は奥手で、此方の恋愛攻勢行為を悉く躲してしまふのよ」

「攻略は難航しているわ、香だつてそうでしょう?」

「それは……」

姉妹の問いかけに、思わず香は口を噤んだ。確かに己も順調とは言い難い、本来の計画であれば既に自分は小太郎とサタデーナイトファイバーでアレがアレして結ばれている筈だつたのだ。

しかし香は先程まで剣を交わしていた小太郎の姿を思い返す。そして断固とした口調で云つた。

「しかし、勃起はしていました」

「それは私達が迫つた時も同じよ」

「ええ、そうですね」

勃起はしているらしい。

香はそつと舌打ちを零した。

「……おかしいですね、もしそうならそろそろ押し倒されても問題ない時期なのですが」

「恋愛攻勢の強さが足りないのかしら?」

「姉様、やはり此処は計画的誘致行為カゲロウさんの薬を使うべきだつたのでは?」

「でも、カゲロウさんからは『それ以上はいけない』と云われているし……」

「因みにどんな薬を使おうとしたのですか?」

「感度三千倍の薬と、媚薬の薬グレートと、睡眠薬と……使えそうなものは一通りね」

感度三千倍とか死ぬのでは? 香は訝しんだ。

仮に小太郎に感度三千倍を使ったとして——香はその果てを想像する。

呼吸をして絶頂、団子を食べた絶頂、ガンランスの竜撃砲で絶頂、己に罵倒されて絶頂、翔蟲を使って絶頂……あれ、存外悪くないのでは? 香は胸の中が暖かい感情で一杯になった。

「……どうにもその手の物は眉唾に感じてしまいますが、効果の程は?」

「グレートではない媚薬をお茶に混ぜて飲ませたら、翌日から一週間位修練場に籠っていたわね」

「岩場の影に張り付いて観察していましたが、その時の小太郎は肌も赤く吐息荒く、常に勃起状態を維持していました、とてもえっちでした、目の法楽です」

「成程、効果は靦面という訳ですか」

「どうやら紛い物ではないらしい。確かな効果があると分かる。今度、お茶に感度三千倍を仕込んで飲ませよう。香は強く領いた。

「でも、その効果を確かめる一回で媚薬は使い切ってしまったし、新しいものを購入しようにもカゲロウさんが領いてくれないから」

「説得すれば宜しいでしょう」

香はそう云って拳を掲げて見せる。どんな人物でも殴れば一発である。何なら香が全力で殴ればラージャンですら地面に埋まる。媚薬や感度三千倍を手にする為ならば多少の犠牲は厭わない。所謂コラテラルダメージと云う奴である。己の平穏と幸せの為の、致し方ない犠牲だ。香はどこまでも真剣^{マッセン}であった。

「駄目よ、彼とはこれからも良い関係を築いていきたいもの」

「そうですね、カゲロウさんは為になる書物や薬を提供してくれる善人です、なるべく穏便に済ませたいと思っています」

「左様ですか、そうなるとやはり正攻法しか」

己の提案が否決され、心なしか香の肩が下がる。

「私が生意気な態度で『ざあこ』と云うと小太郎は嬉しそうに股間を大きくするのですが、お姉ちゃんが迫っても同じ状態、ならばアップローチの仕方自体は間違っていない筈です、お姉ちゃんや私の性格、態度、容姿は魅力的に感じている筈なのです——それでも尚、手を出さない理由がある筈」

「もしかして、衆道なのかしら?」

「いえ、何度かその手の確認も行いましたが反応がありませんでした、小太郎は異性愛者です」

「それを聞いて安心したわ、万が一小太郎君が衆道であっても全力で性癖を此方側に捻じ曲げるつもりだけけれど、手間が無いに越したことはないものね」

「流石です姉様」

「もういつその事、夜這いを仕掛けますか？」

「それはもうやったわ」

「小太郎の勘が鋭いのか、夜這いを仕掛けようとするウツシ教官と夜通し修練をしているのよね」

「むう」

頬を膨らませて不満を露にする香、本当に何をやっても受け入れないではないかと内心で憤慨していた。

尚、これは夜這いを検知したウツシ教官が深夜に小太郎の自宅に突撃し、「やあ愛弟子！ 深夜特訓の時間だよッ！」と修練場に拉致しているからである。彼もまた、影より小太郎の貞操を守る守護者なのだ。しかし当の本人には全く理解されていない模様。一時期意固地になった姉妹が何度も夜這いを仕掛けたせいで、一週間連続深夜の突撃敢行を受け小太郎は本気でウツシ教官に殺意を抱いた。恐らく微塵の躊躇いもなく教官を殺そうとし始めたのはこの頃からである。

「……流石は小太郎、本当に崩れない」

「そうね、全く何が不満なのか、姉様と私がこんなにも想っていると云うのに」

「ミノト、そんな風に云うものではないわ」

爪を噛むミノトをヒノエが窘める。

「しかし、こうも靡かないとなると本当に——」

「うらあアッ！」

「！ あらあら」

香の言葉を遮るようにして荒々しい声と騒音が室内に響いた。全員が音の出所へと視線を向ければ、肩で息を繰り返す小太郎が自宅の戸を勢い良く開いていた。多少土に塗れている様子だが、怪我らしい怪我もない。その視線は一点に集中しており、香は先程までとは異なる嗜虐的な表情を浮かべる。反し、小太郎は憤怒の表情。

「見つけたぞっ……香オ！」

「お兄ちゃん、あの鉄系から抜け出せたんだ、ふうん、やるじゃん♡」

メスガキの仮面を被った香は静かに立ち上がりながら称賛の言葉を口にする。そこまでして小太郎も室内に香以外の人影が在る事に

気付いた。ヒノエとミノト、見慣れた二人の姿に小太郎は僅かに狼狽する。何故自宅にいるのか、自分は何の連絡も受けていないというのに。

「っ、ミノトさんにヒノエさん!? 何で此処に——」

「……お姉ちゃん、さっきの話の続きなのだけれど」

——もうこれ、無理矢理既成事実を作った方が早くない?

「は?」

「へえ」

「ふうん」

この音声の内約は順に小太郎、ヒノエ、ミノトである。小太郎は一体何の話か分からずに本気での困惑の声。対してヒノエ、ミノトは目を細めながら「悪くない」と云った風な反応。小太郎は自身に注がれる二人の視線を感じ、鳥肌が立った。普段とは異なる獣の目——それこそ正に、狩猟対象を見つけた狩人の如く。

何か、途轍もない嫌な予感がした。背後からけたたましい音、素早く背後を見れば独りでに扉が閉まっていた。良く見れば蟲糸の光——ヒノエの指先から糸は伸びていた。思わず、小太郎は引き攣った声を零す。

「一体、何を……云っているんだ」

「お兄ちゃん、もう分かっているんでしょう? 散々二人にアピールされたよね? 私達がお兄ちゃんを『そういう目』で見ているって分かっているよね? だから——」

「抱かせて♡」

「ッ……!」

小太郎は思わず両手で自身の体を掻き抱いた。自分が姉妹をそういう目で見ている様に、彼女達も自分をそういう目で見ている。薄々気付いてはいた、何となく察してはいた、秋波を送られた事は何度もある。それでも尚答えなかったのには理由があった。故に小太郎はこの様な手段を取った三人を睨め付け、叫んだ。

「女の人っていつもそうですよねッ! 男の事を何だと思っているんですか!?!」

「愛玩弟」

「愛護対象」

「愛棒♡」

「倫理観の欠如オ！」

叫びは誰にも届かなかつた。唯々、情欲に塗れた瞳だけが小太郎に向いていた。

「しかし、まあそうですねえ、確かに最近千日手になっていた実感はあります、ならばこそ行動を起こすべき、理解は出来ませぬ、納得も出来ませぬ——既成事実、何と良い響きでしようか」

「ふうむ、しかし私としては小太郎に嫌われる行為は余り……」

「大丈夫だよお姉ちゃん、だって——」

香の視線がすつと、小太郎の顔から下へと向かう。それをなぞるように姉妹の視線もまた落ちた。その視線の先には——小太郎の、小太郎が。

「あら」

「まあ」

「ふふっ」

思わず小太郎は退いた。宛らそれは生まれたての小鹿の如く。そりゃあ美（少）女三人に妖しい雰囲気など出されたら、そうなるだろう。本能は素直だった。しかし、小太郎は素直ではなかつた。

「ば、馬鹿な、何を考えているのだ香！ ヒノエさんツ、ミノトさん!」

「そうは云つても、ほら、お姉ちゃんも随分待ったかなあつて」

「据え膳食わぬは男の恥とも言います」

「男は度胸だよお兄ちゃん♡」

「香は未成年だしっ、お二人は俺の姉でしょう!? 大人として恥ずかしいのですかッ！」

「でも、最近小太郎君はお姉ちゃんって呼んでくれないし〜?」

「ひ、ヒノエお姉ちゃんツ！」

「はーい、お姉ちゃんと一緒にくんずほぐれつしまししょうねえ♡」

「クソア！」

この姉を名乗る痴女は駄目だ、小太郎は即座に矛先を変えた。

「み、ミノトお姉ちゃんッ！ ミノトお姉ちゃんは違うよねッ!？」

小太郎の必死さすら感じる訴えに、そつと目を瞑るミノト。

固唾をのんで見守る小太郎。傍から見れば本能と戦っている様に見えるくもない。小太郎は期待を抱いた。

「どちらかと云えば」

「ど、どちらかと云えば……?？」

「大賛成」

「滅茶苦茶ノリ気じゃねえか!」

期待した己が馬鹿だった。小太郎は思わず打ちひしがれ、その場に崩れ落ちると何度も地面を拳で叩いた。涙が零れそうになる。駄目だ、此処には誰も味方がいない。

「香！ 香ッ！ 知っているか、女性でも強姦罪は適応されるのだぞッ!？」

「でもお兄ちゃん勃起しているよ？ という事は和姦だよね？ 合意

♡ 合意の上だから♡」

「只の生理現象だろうがッ！ くっ、鎮まれ俺のヤマツカミ……ッ!」

「——大体さ、何が不満なのお兄ちゃん？ ミノトお姉ちゃんも、ヒノエお姉ちゃんも、私も、かなりの美人さんだよ？ こんな三人に言い寄られて欲情しないなんて可笑しいよね？」

「いや、勃起はしているんだ」

「なら何で受け入れれないの？ ホモなの？」

「いや、ホモじゃないし」

「——本当かなあ?？」

香がわざとらしい声を上げた。どこか平坦で、含みを持たせていた。小太郎の視線が彼女へと吸い込まれる。その瞳に何か、嗜虐的な炎が灯った様な気がした。

「お兄ちゃんっていつもウツシ教官と一緒に居るよね？ ヒノエお姉ちゃんともミノトお姉ちゃんとも、顔自体は合わせても一緒に過ごす時間はそんなになんって云っていたし、一日の大半を一緒に過ごす人って、やっぱりウツシ教官だよね?？」

「だって、修練の教官だし……」

「ウツシ教官もお兄ちゃんと一緒に居る時は妙に元気だよ」

確かに、小太郎は内心で同意した。あの修練大好きウツシ教官は普段も元気澆刺であるが、自分の修練となると妙に活き活きとし始める。無論、それは他人の修練に手を抜いているという訳ではない。ただ、小太郎の時にだけ妙に体に触れる事が多いとか、手合わせが多いとか、それだけの事だ。

何が言いたいのだこいつは、小太郎は頭を振った。

「いや……気のせいだよ」

「それだけじゃないよ、お兄ちゃん——夜な夜なカゲロウさんに会っているよね？」

会っている、薬を貰う為だ。主に姉妹の恋愛攻勢行為に耐える為の。勿論それだけではない、基本的に狩猟で使用する回復薬や罌、爆弾の類は全てカゲロウさんから卸して貰っている。道具の整理中に不足品に気付いた時は早い内に購入する事を心掛けていただけだ。

「しかも小耳に挟んだのだけれど、カゲロウさんの前で半裸になっていたって」

なっていた、触診の為である。別にやましい意味はない、喉を開いて見せるとか心音を聞かせるとか形式的なものだ。カゲロウさんは医術の心得もあるので狩猟の最中怪我を負った際は多少深いものから軽いものまで、彼に診てもらうのが習慣になっていた。

「里長のフゲンさんと、一緒に温泉に入りに行ったんだって？」

行った。お互いに温泉が好きだから誘われてユクモの方まで遠出した。修練漬けも良いが偶には息抜きも大事だと云われ、ウツシ教官に断った上で行った。あの日は唐突な修練に怯える事もなく心の底から安らぐ事が出来た貴重な一日だった。

「その後、ゴコク様とイオリ君とも合流してマッサージも受けたって」
受けた。フゲンさんと温泉に出かけたという話を聞いたゴコク様が、イオリ君を連れて酒を片手に合流したのだ。イオリ君とはお互いに背中を洗い合って、お風呂上がりは按摩の技術を持つアイルーを雇ってマッサージを受けた。風呂上がりの按摩は格別であった。

「それにお兄ちゃん、自宅にゴコク様の描いたウツシ教官やカゲロウ

さん、フゲンさん、イオリ君の写し絵飾っているよね？ 他の男性陣もお兄ちゃんの写し絵持っているし、何なら懐に大事そうに持ち歩いているし……」

「——」
持っている、里の男陣は何だかんだ言っただけで仲が良い。だから宴会の時などにゴコク様に似顔絵を描いて貰い、お互いに持つていたりする。里の主要な絡みのある人員ならば全員そうだ。

「……………」

冷汗が垂れた、頬から顎先に向けてゆっくりと。

何だ、これは、小太郎は狼狽した。何が起こっているのか分からないが、第三者から見て自身がホモであると言いつけられたい事だけは分かった。問題なのはその言い掛かりに対して自分は反駁の術を持っていない事であり、反駁がない場合はホモと断じられても仕方がないという事だった。

三人の見る目が、「まさか本当にホモ？」みたいな目になっている。違う、全く違うが、事実だけ並べると自分はホモだった。少なくとも自分は違っていると宣ったとしても、全くの第三者からこれらの証言を述べられた上で、「この対象はホモですか？」と問われたら小太郎はあっさりと頷くであろう疑いようのない順然たる事実がそこにあった。

小太郎は思った、自分はホモだったのだろうか。違う筈だ、しかし状況証拠が揃い過ぎていて傍から見れば己は完全無欠のホモであった。俺は、ホモ？ 小太郎は三人を見た。それから自分の下半身を見た。勃起していた。

「お兄ちゃんも男の人が恋愛対象なのかな？」
「そ、そんな訳ないし」

小太郎は否定の言葉を口にした。声は震えていた。

「信じられないなあ、小太郎君、お姉ちゃんとしてはちゃんと証明して欲しいなあ〜」

「さ、三人に迫られて勃起しているでしょう!？」

「それは只の生理現象なのでしょう？ 自分で云った事です、そんなモノで証明したって言われても、心の底から信じる事は出来ません」

「なら、どうしろって……」

「分かっているよね、お兄ちゃん♡」

三人の瞳が再び小太郎の股間に集中した。小太郎の両足が内股になる。目が口以上に雄弁過ぎてどうしようもなかった。小太郎の顔が恥辱に歪む。

「……抱いて証明しろと、そう言いたいのか」

「とつても単純で分かり易いでしょう?」

嬉々としてそう言う香。

しかし此処で女性を抱いたとしても、それはホモが衆道バイ両刀になるだけなのでは? 小太郎は訝しんだ。しかし直接口にする事はない、やっぱりホモじゃないかと云われてしまえば今度こそ外堀ホモになりかねないと思つたからだ。

小太郎と香の視線が交差する。その瞳が語っていた、「ホモじゃないなら抱けるよね?」と。彼女の背後に佇む姉妹もまた、何処か落ち着かない様子で小太郎を見ていた。期待しているのだ、この後の展開に、小太郎が屈する事に。

事、此処に至つて小太郎は悟る、彼女たちは真実、己がホモかどうか等どうでも良いのだと。唯々、小太郎と云う人間を組み敷きたい、そののみを目的としているのである。そして恐らく、此処で小太郎が否を突きつければ「やっぱりホモじゃないか」と嬉々として里中に言い触らすに違いなかった。

何という奴だと小太郎は憤慨した。自身の目的を果たす為にある事ない事言い触らし、あまつさえ人の性癖にけちを付けよう等と——確かに傍から見れば己はホモに見えるかもしれない、しかしそれは彼女達の策略であり、きちんと実態を把握した上で確認すれば何気ない日常の一頁である事が分かるだろう。小太郎はホモではないのだ。固唾を呑んで見守る姉妹を他所に、小太郎は力強く宣言する。

「——いいや、俺は違う道を選ぶ」

「くえっ」

香の瞳がすつと絞られた。

何故彼女達を抱こうとしないのか。それは自身の信条に反するか

らだった。他人と愛し合うという行為はもつと、純粹なものではなければならぬ。それは何らかの代償行為や条件を伴ったものではならぬと信じている。彼女達が相手ならば、猶更。

三人に対して好意を抱いていないのか？ 抱いているとも。劣情は覚えないのか？ 覚えるとも。

しかしそれは、もつと純粹で己から切り出さなければならぬという理想がある。

だからこそ譲れない、だからこそ領けない。何より。

——性交渉しなければホモなんて未来を己は認められない。

小太郎の体から武威が迸った。それは武器を手にしていない人間は纏うには余りにも禍々しく、鋭く、重い。古龍も斯くやと云わんばかりの圧力に、対峙する三人の瞳に剣呑な色が宿る。彼女たちにとっては小太郎の答えなど、どちらでも良かったに違いない、力づくか、そうではないか、それだけの違いだった。

「ふうん、そっかあ、じゃあ初めては無理矢理だね♡」

「久々の手合わせですね小太郎、大丈夫です安心して下さい、予習は完璧です」

「大丈夫だよ小太郎君、優しく手解きしてあげるからね？ まずはお尻の開発からかな」

六つの瞳が立ち向かう小太郎を射貫く。

昏く、粘着質な瞳だと思った。

是が非でも組み敷いてやるという強い意志が覗いている。此処で敗北すれば、恐らく小太郎の思い描く理想とは真逆の結末を辿るに違いない。布団の上で畳が軋むような大運動会が決行される事間違いない。

負けられない戦いであった、故に小太郎は悟った——そうだ、己が鍛えた力は全て、この時、この瞬間の為にあったのだと。すとな、と小太郎の中に納得が落ちた。

どれだけ強大なモンスターを倒しても、どれだけ困難を乗り越えられても、それは小太郎にとって通過点に過ぎなかったのだ。すべてこの時、この瞬間の為。

どれだけの力を持っていても、どれだけの修練を積んでも。

「――救うべき時、救わなくちゃいけない時に勝てなきゃ、何の意味もないッ！」

叫んだ、それは正に未来への咆哮であった。

無我夢中の本気、必死。等身大の小太郎が、己の全てを賭けて、全てを用いて戦う時に見せる気迫。此処で己が退けば里が、大切な人々が、家族が犠牲になる。そう戸口に立つ小太郎が発する、死んでも退かない意思表示。

香の口角が本人の意志とは関係なしに吊り上がる、ヒノエとミノトの頬に紅葉が散った。役満であった。

小太郎の全身より噴き出す闘志が全身全霊で叫んでいた。

俺はホモじゃない、後そういう事はもう少し生活基盤が整ったり、清い交際を経てから至るものであると。

それは、正しく未来を賭けた戦いであった。

「諦めなよお兄ちゃん、三人に勝てる訳ないでしょう？」

「馬鹿野郎、お前、俺は勝つぞお前ッ！」

小太郎は自分に発破を掛け、拳を握り込む。

此処で勝利し、綺麗なまま異性愛者の称号を手に入れる。右手に尊厳を、左手に矜持を。

妖艶な笑みを浮かべながら足を踏み出す三人に挑むように、小太郎もまた一歩足を進めた。

十年前の貴方へ

「うう……ぐ……あ……ッ!？」

酷い夢を見ていた気がした。何か恐ろしい、途轍もなく恐ろしい存在に襲われ、その魔手が届く直前で小太郎は飛び起きた、飛び起きてまず見えたのは——視界一杯に映るウツシ教官の笑顔であった。

思わず小太郎は目を瞬かせ、ウツシ教官はこちらを覗き込むように腰を折ったまま、静かに云った。

「おはよう、愛弟子」

「……ウツシ教官?」

「それでは何ですか、教官が俺を此処まで……?」

「勿論だとも、流石にあの三人を相手取るのは骨が折れたよ、正直真正面から君をもう一度奪還しろと云われたら難しいだろうね」

小太郎はウツシ教官より手渡された水筒に口を付けながら、苦笑する目前の師匠を見る。良く見れば所々ほつれ、斬撃痕の様な掠り傷が見えた。

場所は修練場外周に存在する隠し洞窟、小舟でやって来られる場所の中では一番秘匿性が高いらしい。確かに、小太郎もこのような場所が存在するとは全く知らなかった。洞窟内は天上の高さが二メートル前後で、横幅もそれ程広くない。人が二人も並べば手狭になってしまう程。小太郎はその床に布を敷き詰め寝かされていた。

洞窟内にはウツシ教官の持ち込んだのだろう光蟲の詰められた提灯が掲げられ淡い光で内部を照らしている。

「昨夜の事は覚えてるかい?」

「昨夜……昨夜は……」

ウツシ教官の問いかけに対し、小太郎は昨日の事を思い返そうとする。しかしその瞬間、何か針で内側から突かれた様な痛みが走った。思い出してはいけないと、小太郎の中にある本能が叫んでいた。

「俺は、確か——香と手合わせをして、それから」

それから、言葉が続け小太郎は蒼褪める。そうだ、自分は自宅で、三

人に。自身に恍惚とした表情で手を伸ばす、姉妹の姿を思い出した。小太郎は思わず自身の股間を凝視する。

「お、俺、まさかッ!？」

「落ち着くと良い愛弟子、大丈夫だよ、最後の一線は何とか阻止したから」

「そ、そうですか……良かった」

安堵し、浮かせた腰を再び落とす。最後の一線「は」という表現にやや引つ掛かったものの、一線を越えていないのであれば問題ない。

何だか腰が酷く重く、身体のうちこちに唇に吸われたかのような鬱血痕が散見されたが、小太郎は努めて目を逸らした。

もつとちゃんと現実から目を背けなければ。

小太郎は掛け布団代わりに被せられていた外套を引き寄せ、肩に覆う。小太郎の恰好は殆ど全裸で下着一枚身に着けていなかった。洞窟に吹き込む風が冷たい。

「すまない、逃げ出すのに必死で服を持ってくる余裕がなかったんだ」「いえ、大丈夫です、あの修羅場から抜け出せただけでも助かります……というより、一体あんな場所から俺をどうやって?」

「教えただろうか? 狩猟対象が最も油断するのは、相手が『勝った』と思った瞬間だ、【勝てる】じゃない、『勝った』と思った瞬間だ——彼女達は君の貞操を掛けて揉めていてね、男は女の初めてに、女は男の最後になりたがるというけれど、彼女達の場合は初めても最後も欲しいらしい」

君を回収するのは楽だったが、逃走には骨が折れたよと笑う教官。それは彼の衣装を見れば分かる、と云うよりも良くあの三人から男一人を担いで逃げられたものだと尊敬の念を抱いた。何だかんだ云って、この人も相応に化物なのだ。自分であれば他者を担いで逃走など論外、単独であつても逃げ切れる確率は一割もない、良くて二分か。

改めて、小太郎は自身の無力さを痛感した。知らず知らずの内に外套を掴んでいた手に力が籠る。皺の刻まれたそれを見て、ウツシ教官は目を細めた。

「……今回も、負けてしまったのかい?」

「——はい」

小太郎は強く唇を噛み締め頷く。三人に、という話ではない。香と行った一対一での試合の事であった。

「手も足も、出ませんでした」

思い出す。交わした一閃、一撃、その一秒一秒を。

武器があっても、素手でも。彼女にとつては準備運動の延長線上に過ぎなかったのだろう、汗一つ、息一つ乱さずに、凜とした立ち姿は網膜に焼き付いて離れない。

「モンスターを狩猟する技術と、対人戦闘は全く分野が異なる……と云つても、慰めにもならないのだろうかね」

「すみません……でも香なら、狩猟に関しても俺より余程上手くやれると思います、俺はどちらの分野に於いても、香には及ばない」

絞りだした様な声が漏れた。事実そうだ、彼女は対人戦闘に於いても、狩猟に於いても小太郎の遥か上を行く。それこそ、想像もできないような実力差がある筈だ。

遠い。目指す頂が——余りにも遠い。

覚悟していた筈だ、己が手を伸ばそうとしたそれは天に等しいと。地に足を付けて生きている己が、どうやって空に瞬く星に手を届かせるといふのか。

考えれば考える程、胸が重く、肺が苦しく、手に力が籠った。

「教官」

「うん？」

「どうしたら強くなれますか」

小太郎は修練漬けの毎日を送っている。それは半ば嫌々であるし、目の前の修行大好き妖怪に誘拐されて強引にやらされているという面もある。

だが小太郎は修練に於いて——一度として手を抜いた事はなかった。

肉体を作る為の修行であっても、型稽古の修行であっても、手合わせの修行であっても、小太郎は常に全力であった。全力で今日まで駆け抜けて来た。

全力で、本気で、死力を尽くして『これ』ならば。

或いは、己の一生を費やしても届かないのではないだろうか？ そんな疑念が小太郎の脳裏を過っていた。

「難しい質問だ」

ウツシ教官は呟く。声色から分かる程の苦悩、悩ましいと彼は表情で語っていた。

「戦えば戦う程、修練すれば修練する程、自分の弱さを見せつけられる、自分の弱点を見つけてしまおう、それは一つ二つと増えていって、日に一つの克服すら儘ならない、一つ克服して、また一つ克服して、次へ、克服すれば次へ——次へ、次へ、次へ」

人はそうやって成長する、強くなる。

けれど『己の弱さに向き合い続ける』という行為は苦痛だ、羞恥と、自責の念と、己の不甲斐なさに絶望感すら覚える。だから人は必ず、一定の場所で線引きする。「ここが自分の限界だと」、積みあがった弱さから目を背け、向上心を失くし、己の今に満足感を捏造する。

ただ己の弱さだけが積み上がり、焦燥感だけが残る日々。苦しいだろう、辛いだろう。ウツシという人間にとってそれは余りにも馴染みある感覚だ。時間を掛ける事——それが唯一の解決方法である事を理解している。けれど、正しきで感情は救われない。

自分たちは今、強くなりたいのだから。

「強くなる道に近道は存在しない——けれど、全力で走り続けなければいつかきつと、天にも届くと僕は信じている」

ウツシ教官の声が洞窟内に反響した。俯いていた顔を上げた。己を見下ろす教官は信じていた、風魔小太郎と云う男を、一人のハンターを、己が愛弟子と呼ぶ唯一無二の存在を。自分の通った道を、彼ならば走破して見せると。

自身を見下ろす眼差しに小太郎は暫し言葉を忘れた。彼のその、余りにも力強い瞳に、信頼に輝く両目に、既視感があったのだ。

思い出す。

こんな目をしていた人が居た。

目に焼き付いているのは、小柄な背丈。まだ手に馴染まないであろう

う片手剣を無造作に担いで、当時小太郎が手も足も出なかつたりオレウスを下して、その亡骸の上に立つ少女。

そうだ、最初にこんな風に——自分ならば出来ると、待っていると口にしてくれた彼女は。

——ずっと此処で待っているから。

風魔小太郎

天に立つ彼女の瞳は、いつだって己を見ていた。

「俺は」

小太郎は自分を恥じた、一瞬でも諦観の感情を抱いてしまった己に喝を入れる。外套を握り締めたまま、告げる。

「二日でも、一時間でも、一分でも、一秒でも早く……強くなりたい！」

彼女に並びたい

「——ああ、応援するよ、愛弟子」

ウツシ教官の手が頭の上に乗せられる。くしゃりと撫でられた彼の手からは、万感の想いが伝わるようだった。覗き込んだ彼の瞳と、小太郎の瞳が交差する。互いの瞳には確かな熱意が募っていた。

「協力は惜しまない、元よりそういう約束だ、僕は僕の出来得る限り、君に協力すると誓った……君には文字通り、【僕の全て】を伝授する」

「教官」

「彼女の強さは正直異次元と云っても良い、月と背比べをする様なものさ、目指す果てが同じ『人』ならば善い、それは等身大の夢と云う奴だ——けれど君の歩む道はそうじゃない、そんな事は疾うの昔に知っていただろう？」

「——はい、例え星に手を伸ばす様な話だとしても、俺は」

「それでこそさ」

ウツシ教官は笑った、彼らしくもない破顔だと思った。無邪気で、快活で、莞爾とした笑みの中に仄かな羨望と称賛と、悲壮の混じった笑みだった。

ウツシ教官の指先が小太郎の額を小突き、彼は呟いた。

「だから君は、『愛弟子』なんだ」

■

「そういえば……その、教官」

「うん？ 何だい」

「教官は結婚とか、しないのですか」

「結婚？　僕が？」

「はい、教官が誰かとお付き合いましたとか、聞いた事がなかったので、教官は里での人気もありますし、ギルドでも評判が良いでしょう、結婚しようと思えば出来るのでは？」

「まあ、そうだねえ、しようと思えば出来るだろうけれど、当面その予定はないかなあ」

「何故か聞いても？」

「あー……そうだね」

ウツシ教官は頬を掻き、ばつが悪そうに答えた。

「そういう気持ちに今はなれないっていうのもあるし、独りが気楽だっていうのもある、この教官っていう立場も気に入っているしね、誰かと結ばれたりして家庭を持ったらこうして誰かを指導する時間も短くなってしまふ——深夜の秘密特訓とか、伴侶が居たらまず無理だろう？」

「あれはもう勘弁して下さい」

「ははは、僕は当面する予定はないよ、僕はね——というのが建前の理由だ」

「！　建前ですか、そうなると本音があるのです？」

「そりゃあ勿論、今のは誰かからお誘い頂いた時の断り文句さ、本音は滅多に吐かないよ」

「僕はね、男が好きなんだ」

沈黙が流れた。余りにも昏く、痛みすら覚える沈黙であった。

心なしか洞窟内の温度が下がったような気がする。腕に生えた産毛が鳥肌と共に逆立った。唇を数度震わせ、努めて冷静を装いながら声を出す。

「そつ……う、なんですか、初耳です」

「云つてなかったから、当り前さ」

すんなりと口から出そうとした言葉は、思いのほか濁って聞こえた。ウツシ教官から一步、二歩と音もなく離れる。その分だけ、彼は距離を詰めた。教官が横目で小太郎を見る、綺麗な流し目だった、妖

艶と云つても良い。小太郎の尻がきゅつと締まった。

「——所で我が愛弟子よ」

「は、何でしょうか教官」

「これは全く、僕達の間とは何の関係もない話ではあるのだけれど……」

「自分好みに育てる光源氏計画というものを知っているかい？」

「畜生ア！」

小太郎はその場から飛び上がり、涙目で自分の尻を両手で庇った。それを見たウツシ教官は腹を抱え、笑いながら手を振る。彼の笑い声が洞窟内に響いていた。

「ハハハハハハハッ！ 冗談、冗談だよ愛弟子！」

「その冗談全然笑えませんかね!! 身の危険しか感じられませんでしたよッ!! というか本当に冗談なんですか！ 今、俺貞操の危機だったりしませんかッ!!」

「大丈夫、大丈夫、僕はちゃんと女性も好きさ」

「つたく……やめて下さいよ本当、冷汗掻きました、寿命が十年縮まった気分です」

「悪いね、揶揄ったりして、でもこういう方面で揶揄って大丈夫なら、彼女達と相對しても問題ないだろう」

「……………」

「複雑かい？」

「まあ、俺も少なからず好意は寄せていましたから……いえ、嘘を吐きました、少なからず何て表現では足りない位には想っています、だから別に、あんな事があつたからつてどうこうする気も、そういう感情も湧いてきません」

「羨ましい限りだ」

「それはどつちの意味ですか」

小太郎は再び尻を手で覆った。ウツシ教官は苦笑いを零し、肩を竦める。

「それ程までに想い合える関係が羨ましいって事だよ、兎角、何かあつたなら力になるよ、元より僕は君の味方だ、遠慮なく頼ってくれ」

「……助かります」

「ああ」

「本当に、いつでも頼ってくれて良いからね」

そう呟いたウツシ教官は、どこか恍惚とした表情で小太郎の頸筋についた鬱血痕をじつと見つめていた。

■

「実力行使……は厳しい、私単独では無理が……ならばやはり誰かに薬を都合して貰って、でもカゲロウさん以外だと誰に……ッ！ 催眠、そういうのもあるのね」

カムラの里、ギルド内部のカウンターに於いて一心不乱に何らかの本を読むミノト。時刻は昼過ぎ、里のギルドを利用するハンターは少数である為、村の窓口担当であるヒノエと比較するとミノトは手透きの時間が多かった。大抵は他所ギルドとの取次や各所書類仕事であったり、搬入の受け入れ作業であったり、正直受付嬢としての仕事は稀である。

そこにゆつくりと近づくと近づくゴコクの姿。彼はカウンターで本を読みながらぶつぶつと何事かを呟くミノトを見て、何とも形容し難い表情を浮かべながら声を掛けた。

「あー、ごほん、今良いゲコか？」

「ゴコク様」

ミノトは声を掛けられ漸くゴコクが存在に気付く。読んでいた本を閉じると静かに、それでいていつも通りの澄まし顔で対応した。

「まあ、今は人もおらんでゲコ、五月蠅くは云わないゲコが……」

そう口にしながらか、そつと本のタイトルに目をやるゴコク。彼の頬に一筋の冷汗が流れた。

「何を読んでいたゲコ？」

『「想い人に振り向いて貰う百八の方法」夜這いから薬漬けまで』です」

「……せめて表紙に覆いを付けるでゲコ」

「何故です？」

「色々と情操教育に宜しくないでゲコ」

寧ろ何故それで大丈夫だと思ったのか、ゴコクは思わず胸内で悪態を吐いた。少なくとも里の子ども衆には見せられない。

よもや姉のヒノエ大丈夫であろうな、あんな大通路でこんな本を読んでいる等という事になれば大問題である。後でこつそり様子を見に行こう、ゴコクはそう決めた。

「……まあ、今それは置いておくゲコ」

本当は置いておきたくないが、目の前のこの、深淵を覗いている様な気分になる真っ黒な瞳は直視に堪えない。ゴコクは努めて視線を逸らしながら懐から数枚の紙を取り出した。

それをカウンターの上に広げるとミノトが紙面を覗き込む。普段とは異なる書式、格式張った書き方と署名、赤い印章に自然と彼女の意識が仕事のそれに切り替わった。

「これは？」

「今朝方、『ドンドルマ』、『ミナガルデ』から連名で届いた要請書ゲコ」

「……要請書？」

「うむ、ハンター風魔小太郎の【G級】入りを——」

「なりません」

間髪入れず、ミノトは言葉を被せた。じつと書面を睨みつける様に見つめていたミノトが視線を上げると、ゴコクの瞳とがち合う。瞳は酷く濁っていた。

「ゴコク様、その件に関しては既に何度も話し合いの場を設けたではありませんか」

「……しかしなあ、ゲコ」

こうなるだろうと予想していたゴコクは、恐らく首を縦には振らないだろうと予感しつつも説得を試みた。事実、いつまでも要請を跳ね返ける事は難しいのだから。

「上位の任務に就けるハンターは限られておる、ましてや腕利きはどこも手放したくなりやあせんゲコ、その上【G】の称号を持つハンターともなると、本当に両手の指の数で数えられる程しかおらん……実を云うと、少し前に『龍暦院』からも称号受諾の催促が来とるでゲコ」
「ええ、存じております、しかし私と姉様は断固として反対です、【G】

の称号を得たハンターは原則として招集命令を拒否する事は出来ません、彼は里の大きな防衛戦力の一人です、そんな彼に任務で抜かれてしまつては痛手が過ぎる、百竜夜行が多少の落ち着きを見せたとは云え余りにも時期が悪いでしょう」

「ならば、時期が来れば問題ないゲコか」

「ええ、尤もそんな時期は一生来ないと思われませんが」

「……………」

それは事実上の飼い殺し宣言か、或いはかか^尻あ^敷天下宣言か。ゴコクには分からなかったが、少なくとも彼女が本気でそう思っている事だけは確かであった。

「既に我がカムラの里からは香という「G」の称号者を輩出したでしょう、ハンターズギルドは本来別個の組織、規模や貢献度で多少の上下はあつても、これ以上は欲張り過ぎというものです」

「成程、成程……それで、本音は？」

「任務で何ヶ月も小太郎と会えないとか私を殺す気ですか？　ぶち殺しますよ？」

ミノトは本気であつた、あれはやると云えばやる瞳だとゴコクは思った。

ただでさえ一日に一時間も小太郎と触れ合う時間が確保出来ないというのに、ギルドの、それもG相当のクエストとなれば平気で大陸中に派遣される。上位であれば長くとも一週間そこら、短くて日帰り、一日二日程度だが、それですら苦痛であるミノトにとって数ヶ月単位の遠征など到底認める訳にはいかない。確実にミノトの中にある小太郎成分が枯渇する。

ミノトは思った。私に死ねと云うのか？　ギルドはカルネアデスの板を知らないのだろうか、生き残る為であれば他者を殺害しても無罪放免なのである。もし小太郎を自身から引き離すつもりであるのなら上等である、殺してでもうばいとる。

「いい加減弟離れするゲコよ」

「近い内に弟ではなくるので問題ありません」

「そういう話ではないでゲコなあ……………」

何でこんな風に育ってしまったのか、儂か、儂が育て方を間違ったのか、それともフゲンか？ ゴコクは強く己の教育方針を見直そうと決意した。この様な症例はこの姉妹だけで十二分である。

尚、その種は既に撒かれ芽吹いている事を彼は知らない。姉妹を見て育った団子屋の少女は、「既成事実実力行使、そういうのもあるのか」状況で自身の連射砲を夜な夜な磨いている。将来の里長が胃を痛める未来は確定していた。

「私は、小太郎が任務や狩猟に絡むことに反対はしません、小太郎の天稟は疑っておりませんし、何より男おのこというものはそういうものだと思解もしております、しかしそれは十二分な備え、修練、実力を持ってこそこの話……誰が好き好んで想い人を死地に送りたい等と思いませんようか」

「しかしのう、香より腕前は保証されたと聞いたでゲコよ」

「確かに香から小太郎の成長については聞き及んでいます、古龍や禁忌級のモンスターと対峙しても易々と落命はしないと——しかし、可能性はゼロではありません、そうでなくともゴコク様、貴方も御存知の筈でしょう」

ミノトの瞳がすつと絞られ、ゴコクを射貫いた。

「上位と【G】伝説の間には余りにも厚い——厚い壁があります」

「むう……」

思わず唸る、それは紛れもない事実であったから。

全ハンターの内、上位のライセンスを持つハンターは三割程度と云われている。残りの殆どは下位ハンターで占められ、【G】の称号を持つハンターともなれば一%にも満たない。

上位のハンターが全体の三割と聞いた時、存外に多いと口にする者も居る。しかし、ハンターライセンスの括りは余りにも大きい。下位のハンターと云っても難度一の採取任務しか受注しない者が居る様に、上位にも難度四で手一杯の者も居れば、難度七の掃討任務を請け負う者も居る。その実力差は下位のそれよりも遥かに大きい。上位の上澄み、称号を授与されるに足るハンターの数などどれ程いるものか。

現に称号を授与される者が両手の指で足りてしまう現状がそれを示している。

人手不足——現状の称号持ちは、これに尽きる。

しかしその人手不足は、上位と【G】の隔絶した難度差から生まれたものなのだ。補填と一口に言ってしまうても、その難しさはギルドに属する者ならば良く知っている。

「下位と上位の差どころの話ではない、文字通り挑むのは御伽噺に出て来るような伝説の存在、其処らに蔓延るモンスターなど比較にもならない、塵芥に等しい……自然災害に生身一つで挑むに等しい蛮行です、それでも尚勝利するからこそ、彼らは【G】伝説の称号を持っている——私はそんな存在と小太郎が戦うと想像しただけで耐えられません」
「しかし、当の本人である小太郎は未だ【G】その称号を求めて努力しているでゲコ——あの子の隣に並ぶ為に」

「……………」
ミノトの能面の様な表情が、ゴコクの一言によってくしゃりと歪んだ。忌々しい表情、或いは憎悪の念。凡そ彼女らしからぬ感情に、ゴコクは暫し面食らった。

「直ぐに気付きます、それが無謀であると——あの子は【特別】なのです」

爪を噛むミノトの表情がゴコクの目に強く焼き付いた。

「兎も角、私と姉様は以前申し上げた通り、小太郎の称号受諾には反対です、彼にはまだ私たちの手助け出来る範囲に居て欲しい」

「…………相分かった、返事は一旦預かるでゲコ、しかし良く覚えておくでゲコよ、『ドンドルマ』、『ミナガルデ』、『龍暦院』、これだけのギルドが彼の【G】入りを望んでいるゲコ、恐らくそう遠くない内に『タンジアの港』、『バルバレ』、『ロックラック』からも要望が届くと思うでゲコ——既に半数は賛成している状況、もし過半を超えれば彼の【G】入りは確実と云っても良いゲコ」

「……………」

「遅いか早いかの違い……否、ワシが今更云うまでもない事ゲコ、ミノト、覚悟はしておきなさい」

そう告げると、静かに立ち去るゴコク。その小さな背中を見送りながらミノトは伏した本の表紙に爪を立て、苦々しい表情を隠さず唇を噛む。

「覚悟など、出来る筈がないでしょう」

それが出来るのならば、疾うの昔にしていた筈なのだから。

空に挑む

『良いですか小太郎、決して無茶はしない事……最近付近の生態系の乱れが深刻化しています、百竜夜行の兆しすら見えない状況で大型モンスターの痕跡すら発見出来ないのは異常よ、ギルドはこの事態に他ギルドからの調査団派遣を依頼しています、既に事態は私達カムラのみで收拾可能な範囲を逸脱していると断言しても良い程に』

小太郎は任務地へと赴く前、神妙な表情でミノトが口にしてた事を思い出していた。最近、狩猟環境が変化し生態系に歪みが生じているという話は聞いていたが、他所のギルドが出張って来る程に悪化している事は知らなかった。

今回の任務は本来であれば里の防衛網に引掛かる狩猟対象が存在しないかを確かめる警邏任務——しかし生態系の歪みから痕跡調査へと切り替わったのが今朝の事。

『今回の任務はモンスターの痕跡、及び生態系の調査、調査団が現地に到着する前にある程度情報を纏めておきたいの——無理をしない範囲で、お願い』

小太郎は任務地へ到着し暫く周囲を散策した後、そつと呟いた。

「嫌に静かだ」

視線を左右に散らす。風に揺れる草木、笹の葉、木漏れ日の向こう側に見える雲。しかしモンスターの姿は影すら見えない。オトモの二匹を連れただまま周囲を歩き、すんと鼻を鳴らす。

「……生命の匂いがしない」

「にやあ、匂いですかにや？」

「ああ、雪山とか、あの辺なら分かるのだけれどな、森林でこうも匂いがしないと——流石におかしい」

氷の世界は生命の匂いがしない。音もなく、ただ白が広がる死の世界。反し、森というのは生命に溢れた世界。当然、そこで生き死ぬ動物の匂いが必ず存在する。小太郎が嗅いだ匂いは過去のそれと比較し、余りにも薄い。モンスターの活動が弱まっている証拠だった。

「登るぞ、上から一望する」

「bauer」

一声かけ、小太郎は翔蟲を用いて壁を駆け上がる。苦無に翔蟲の糸を括り付け投擲、刃先を壁に突き刺す事で支点とし飛び上がる。ウツシ教官直伝の壁駆けである。

狩猟地区中央に鎮座する山脈、その頂まで一気に登った小太郎は周囲を一望出来る位置に立った。肌寒く、風の強い場所だ、しかし一際背の高い山は狩猟地区を丸々見渡すには丁度良い監視場所であった。

風に纏いを揺らしながら下界を見下ろす小太郎は、ガンランスを肩に担いだまま目を細める。ハンターとして鍛えられた視界は確りと現状を映し出していた。キャンプ近くの川辺、平地、山岳へ続く山道、滝つぼに廃寺、それらに満遍なく視線を配り。

「情報通りだ……大型も、小型も、環境生物すら」
存在しない。

思わず漏れた呟き。本来この周辺を縄張りになっているモンスター達の大移動、水辺も、社近辺も、森林地帯も、平原部分も、我が物顔で闊歩しているモンスターが一匹たりとも見当たらない。それは大型に限らず、草食、肉食問わず小型モンスターまで。更に不可解なのは環境生物までもが姿を消している事だった。百竜夜行の吉兆があれば小型、大型モンスターが姿を消す事もある。しかし、環境生物は違う、彼らは縄張りや地域にどのような変化が起きても一斉に姿を消す事はない。必ず過程が在る筈だった。変化があったとしても、それは緩やかでなければならぬ。

どうなっている？ 小太郎は思わず唇を噛んだ。小太郎が苦悩する時の癖だった。今まで全く見られなかった異常、果たして何が起ころうとしているのか。少なくとも、良い予感だけはしない。

これでは調査がどうの話ではない。一応地道に周囲を回って痕跡を探すつもりではあったが、果たして成果に期待出来るかどうか。

「――？」

不意に、小太郎は自分の指先が震えている事に気付いた。山頂は肌

寒い、寒さから来る震えだろうかと思ひ、しかし斜面にへばり付く二匹のオトモの姿を見て違ふと確信する。

「にや……だ、旦那様、何だか妙な寒気が」

「……ああ、俺もだ」

そこまで口にして、ぶわりと小太郎は毛が逆立った。それはハンターとしての勘か、或いはウツシ教官に鍛えられた生存本能か。咄嗟に空を仰いだ小太郎は、天空にきらりと光る何かが見えた気がした。細く頼りない、糸くずのような白。

気のせい？ 否、違ふと小太郎の本能が告げる。徐々にはつきりと視界に映るそれは空を流れる星の様で、思わず口に出す。

「——流れ星？」

蒼穹を流れる星、それはそうとしか表現できない。しかし数秒その星を見つめていた小太郎は、件の流れ星が段々と近づいて来ている事に気付く。その速度はかなりのもの、小太郎の目測が誤りでなければ落下地点は——。

「ッ！」

「にや、旦那様?! 何——」

咄嗟に二匹を掴み、小太郎は山頂を飛び降りた。余りに急な事でオトモ二匹から非難の声上がる。しかし、構っていられる程の余裕はなかった。それこそ、一言を惜しむ程に。

次の瞬間、山頂に何かが衝突し、衝撃波が爆音と共に飛来した。天より飛来したそれは山頂を抉り、宛ら千切る様な形で岩石諸共粉碎する。宙に身を投げ出した小太郎は翔蟲を使つて減速、しかし咄嗟の事で体勢が悪く半ば叩きつけられるような形で地面に転がった。キヤットとドッグも斜面を蹴つて減速し、辛うじて受け身に成功する。

三人が落下したのは水辺、滝の近くであつた。水に塗れながら小太郎がガンランスを掴めば、山頂を粉碎し、そのまま地面に着陸を果たした星の正体が、水飛沫を浴びながら待ち受けていた。

「バルファルク——」

奇妙なシルエット、竜という種をどこまでもシャープに、流線形で

描いた生物。空駆ける姿、彗星の如く。その文言に偽りはなかった、流れ星と見まがう程の飛行速度、山の一角を消し飛ばす威力、そしてそれを成して尚砕けぬ肉体。

小太郎は頭上を仰ぎ見る。先ほどまで自分たちが立っていた山頂は、まるで最初から存在しなかったかの様に抉られ粉々になっていた。

小太郎はバルファルクと対峙しながら固唾を飲む。押し掛かる威圧感、肌を刺すような殺気。特殊個体だろうとあたりを付ける。上位ではない、恐らく称号持ちが相手をする様な——【伝説級】の存在。バルファルクそのものが遠方からの目撃例こそあれ、こうして人と対峙する事自体少ない、それこそカムラでは。唐突な襲撃は興奮故か、僅かに首を上下させ此方を鋭く睨みつけるバルファルク。相対し、注視していたからこそ小太郎はその違和に気付いた。

「……片目が」
潰されている。

まるで上から炎で焼かれた様な爛れ具合。視界は完全に塞がっているだろう、残った片目で此方を見据える彼の竜はどこかで一戦を交えた後だったのか。

小太郎を挟むようにして合流したドッグとキャットは、半ば狂乱しながら進言する。

「にやつ！ ご主人様、あのバルファルクは尋常じゃないニヤ！ 普通の個体ならまだしも、どう見ても特殊個体！ 此処は一度退いて里にッ……！」

「無理だ」

ドッグの言葉を遮り、小太郎はガンランスに弾薬を装填した。明らかに気が立っている相手を前に背中を見せて易々と逃げられるとも思えない。それに先程見せた、彗星の如き飛行能力。単純な速力比べでこいつに勝てる存在など、そうは居まい。

下手をすれば、こいつを引き連れて里に戻る事になる。

「此処で狩猟する」

それだけは駄目だった。

こいつは此処で止めなくてはならない。少なくとも、今回の異変と無関係という事はないだろう。

ガンランスを構える。途端、目のバルファルクから放たれる殺気が一層濃くなつた様な気がした。唐突な死闘、明らかな強敵。風魔小太郎という存在が戦つて来たモンスターの中で間違いなく最強クラスと云える。

普段の小太郎であれば泣き言を云いつつ、撤退の方向で固めていたかもしれない。

安全に、安寧に——それが小太郎の狩猟に於けるモットーだ。命がけなど馬鹿げている、死なない程度に、効率良く、けれど今だけは。

「ふーッ……」

こいつを踏み越えて、己は高みに登る。

死にたくないからこそ、この武器を担いだ。

けれどこの年になって——死なないだけでは届かぬのだと知った。死線に身を置くからこそ超えられる壁がある。挑戦するからこそ得られる強さがある。呆然と見上げるだけでは届かない、頂きへ。

「いつも通りだ、俺達なら狩れる、そうだろう?」

「——にやあ、こうなればやけっぱちニヤ! 文字通りオトモしますニヤ、何処までもッ!」

「バウッ!」

叫び、オトモ二匹も覚悟を決める。否やはない、狩ると決めたのならば怯えも恐怖も捨てる。

各々が武器を構えると同時、バルファルクの足元から飛沫が上がり巨体が加速した。目を焼く閃光、爆音を打ち鳴らす翼に小太郎達は各々飛び退く。

一瞬間を置いてバルファルクが虚空を穿つ。

「ッ、うお……!」

通過した風圧と衝撃に地面を転がる小太郎。慌てて後方を見れば地面を踏みしめ、減速し反転したバルファルクの姿。見てから躲せた訳ではない、突進の予備動作——地面を踏みしめ、沈んだ姿勢から辛

うじて回避が間に合ったに過ぎない。想像以上の加速、思わず舌打ちを零す。

「速いのは分かっていたが……その巨体で、どういう速度だツ!？」

通常の個体より、遙かに速い——少なくとも真つ当なやり方では追いつけないと悟る。

超高速による突進、攻撃と回避を兼ね備えた行動。そもそも向こうに追いつけないのならば攻撃の手が無い。鉄糸を張って待ち構えるか？ 小太郎は翔蟲に手を掛けるも、分の悪い賭けだと内心で悪態を吐く。

「旦那様、ドッグが動きを止めますニヤ！」

「っ、出来るのか」

「お任せあれ！」

告げ、ドッグは地面に潜り消えた。何をするのは分からない、しかし出来るというのならば信じるのみ。小太郎はガルクと視線を交わし共に飛び出す。

「キャットツ！」

「バウツ！」

足元に刃を差し込み、竜撃砲。爆音と共に水飛沫が上がリ、熱によつて蒸気が噴き出す。白い蒸気を切り裂いて飛び出すガルクことキャット、敵の眼球目掛けて苦無を投擲。しかし高速で駆ける彼の竜にとつて飛来する苦無など余りに鈍い、軽くステップを踏み苦無は虚空に消える。しかし、バルファルクは苦無に結び付いた糸に気付いた。

「即席の代物としては十二分だろう！」

回避した筈の苦無は唐突に軌道を変え、まるで意志を持ったかのようバルファルクの頸元に突き刺さる。そのまま糸は何重に巻き付き、小太郎の手元へと糸は続く。

バルファルクはそのまま身を沈め、小太郎はそれを跳躍の前動作と判断。瞬時に糸をもう一本の苦無へと括り付け、地面に深く打ち込んだ。僅かにバルファルクの体が傾くも、小太郎はバルファルクの頸元に突き刺さった苦無を見て舌打ちを零す。

「浅いか……！」

それに本数が足りていない。あの翼、空気を吸い込む異音、尋常ではない推進力を誇るのだろう、鉄糸一本では到底足りない、四方を糸で雁字搦めにして漸く制動出来るかどうか。

「キャット！」

「ガウツ！」

即座に指示、意図を汲み取ったガルクが更に苦無を投擲。しかし此方のやり方を察したのだろう、バルファルクは飛来する苦無を見るや否や両の翼を使って空間ごと苦無を薙ぎ払う。勢いを失った苦無は糸による操作が効かない。しかしそれで良い、馬鹿正直に何度も同じ手を繰り返すつもりはない。小太郎はその隙にリロードを済ませ、肉薄。

「直接打ち込めばツ……！」

右手にガンランス、左手に苦無を持って外殻に飛びつく。ガンランスの杭にて穴を穿ち、其処に苦無を撃ち込むつもりだった。しかし、直前でバルファルクの地力が勝り、固定していた地面の苦無が引き抜かれる。

振り抜いたガンランスの刺突は空振り。バルファルクは大きく跳躍、距離が空く。

距離が空けば——小太郎は咄嗟に叫んだ。

「突進が来るぞツ！」

警告と同時にバルファルクの突進が真横を掠めた。水面に転がりながら辛うじて回避に成功する。まるで水面を裂くように飛沫を上げて飛来する影、轟音と共に突き抜ける一陣の風。ガルクと小太郎は吹き抜けた疾風に体を押される。あの体を自由にしてしまった。

「クソ……！」

もう一度苦無を突き刺して、地面に墮とすしかない。太腿の装具に手を掛け鉄糸を巻き付ける。耳に届く異音——空気を取り込む吸引音。

もう一度突進が来る、構えようとして。

「旦那様ツ、準備完了にや！」

「ッ！」

聞くや否や小太郎は地下より戻ったアイルーであるドッグの傍へ駆け寄った。やはり狙いは小太郎、飛来する巨体は瞬く間に彼我の距離を潰し。

「ネットランチャー網大砲」ニヤー！」

ぼん、と軽い音と共に放たれた大網に捉えられた。ドッグが肩に担いだ大筒には落とし穴にも用いられるネットが装填されており、それを真正面に射出する機構を有す。よもや空間に網が張られるとは思っていなかったのか、唐突な妨害に直線を描いていた突進は曲がり、そのまま地面に激突する。水飛沫と土砂を撒き散らしながら転がったバルファルクはネットに絡めとられ、思う様に動けない様子だった。手足を振り回し、足掻いている。上手くいった、小太郎はドッグに喝采を挙げたい気分であった。

「ここで決める……ッ！」

「ニヤー！」

大筒を投げ捨て、小太郎とドッグ、遅れてキャットが一気に肉薄、動きを止めたバルファルクに飛び掛かる。小太郎はガンランスを振りかぶり、隙だらけの頸元目掛けて突き出した。刃先は確かに肉を穿ち、同時にトリガー。竜撃砲が直撃する。

爆炎と轟音、反動で後退しながら爆炎を裂く。確かに手応えはあった。見れば抉れた爛れた頸元、血を撒き散らしながら咆哮するバルファルクは、しかし健在。

上位とは比べ物にならない、桁違いの生命力。通常ならば息絶えてもおかしくない致命傷、或いは想像以上に内部が硬かったのか。一発で駄目なら二発、此処まで肉が露出すれば竜撃杭とて致命傷だろう。

小太郎はそう考え第二撃を加えようとリロードを行い、はつと顔を上げる。

異音、翼から——否。

「胸元が……!?!」

空気を取り込んでいるのか、或いは別の何かか。一切の動きを止め、胸元の外殻を開きながら光り輝くバルファルク。まるで赤い線の

様に、身体の各部位が輝く。見知らぬ動作だ、しかし静観できる状況ではない。何か途轍もなく嫌な予感がする。少なくとも何かしらの予備動作である事は確実であった。

「鉄糸をー」

「ニヤアー！」

小太郎は本能的に叫んでいた。全員が攻撃の手を止め苦無をその体に打ち込み、地面へと繋ぐ。背中、横腹、左足、打ち込んだ楔は三点。深く、確りと打ち込んだ。強靱な翔蟲の糸で三点を拘束されれば、如何に古龍と云えど飛び立つ事も出来まい。

しかし、小太郎達の予想に反しバルファルクは凄まじい衝撃波と共に消えた。

「ッ、馬鹿な、抜けられたっ!？」

凄まじい爆音と衝撃だった。地面が捲り上がり、水飛沫が膜となって飛び散る。余りの衝撃に目も明けられず、再び開いた視界にバルファルクの姿はない。千切れ、引き抜かれた鉄糸と苦無が虚空を舞う。姿は見えない、しかし駆動音は聞こえる。はつとして頭上を仰げば遙か向こう、蒼穹に見える一筋の光。

邂逅の一撃と同じ突進技——違う、それよりも速い。

その煌めき——彗星の如く。

「避け——」

着弾。

水面が捲り上がり、世界から音が消える。目で捉える事も出来なかった、理解出来たのは辛うじて直撃を避けた事。しかし攻撃範囲が余りにも桁違い過ぎた。着弾地点を中心に龍気爆発が発生、小太郎とドッグ、キヤットは宙に打ち上げられる。

キヤットは近場の木に叩きつけられ、ドッグはそのまま体を水面に打ち付ける。小太郎は衝撃で捲れ上がり、露出した滝の内壁に叩きつけられ、一拍遅れて飛来した滝に吞まれた。水中に吞まれながらもガランランスを握り、躊躇わずにトリガー。方向感覚を失う前に水中で爆発が巻き起こり、小太郎の体が外界へと打ち出される。

反動で地面へと打ち上げられた小太郎は咳き込みながら顔を上げ

る。

頸元より夥しい血を撒き散らすバルファルクは、凹み抉れた地面に立ったまま小太郎を見据える。

——鉄系での制動は不可能。

交わした視線は一瞬、次の瞬間にはバルファルクが飛び上がり、自身の翼をランスの様に掲げていた。小太郎は這った姿勢のまま横へと身を投げ、打ち下ろされた一撃を裂ける。地面を穿ち、舞った砂塵を裂きながら後退する。

全身を襲う鈍痛、額から流れる血を拭う暇もなく視線を走らせる。オトモ二匹はどちらも戦闘不能状態、単独で状況を切り抜けなければならぬ。後退した小太郎目掛けて更に翼での一撃、辛うじて回避するも翼の先で小規模の爆発が起き、横合いへと吹き飛ばされた。

「痛、ッ……クソー！」

地面を転がりながらランスを地面に打ち付け減速、素早くロード。バルファルクは翼を後ろに向け突進の姿勢を見せる。最早動きを止める事すら叶わない、機動力に差があり過ぎる。

どうする？ 小太郎は内心で問いかける。最早彼奴の動きを止める術を自身は持っていない。畏は持ち込んでいない、そもそも持ち込んでいても設置している暇などないと断言できる。鉄系は千切られる、苦無で地面に固定した所で全力を出せば拘束たり得ないと奴自身が証明した。

考える——攻撃自体は通る、外殻は頑丈だが脆い部分は存在する。喉元は己の竜撃砲で抉れている、出血も酷い、長期戦を行う腹積もりではない筈。危険を感じたからこそ、彼奴は胸を開いたのではないのか。であれば勝機が零という訳ではない。此方も一撃入れられる状況に持っていければ。

小太郎はバルファルクを見据え、血の混じった唾を呑んだ。

超高速で突進を行う相手に、確実に攻撃を撃ち込める方法。

小太郎はランスを構えたまま覚悟を決めた。左手で苦無を抜き、鉄系で苦無と自身の腕を強く縛った。

失敗すれば——死ぬだろう。

「来いッ！」

叫ぶと同時、バルファルクが爆音を打ち鳴らして突進。それに合わせる形で小太郎は後方へと跳躍。間を置かずに着弾。小太郎の全身が鈍い音を立て、四肢が挽げたと思う程の衝撃が走った。

しかし、生きている。バルファルクの顔面に張り付く形で小太郎は突進を受け、強引にクロスレンジへと持ち込んだ。

腹に凄まじい衝撃、せり上がった鉄臭いそれを呑み下す。同時に苦無を突き刺し、翔蟲を使って自分の腕とバルファルクの頭部を固定。

ぐんぐんと高度が上がる。空を駆ける彗星、蒼穹を抜け、雲を突き抜け、それでも尚止まらない。凄まじい速度の中で、小太郎は菌茎を？き出しにしてガンランスを振り上げる。ぎよろりと、此方を睨みつけるバルファルクの瞳と目が合った。

「勝ったア——ッ！」

風圧に舌を揺らしながら全力で叫んだ。

矛先が振り下ろされる。

狙いは眼球。

ぞぶりと埋まった刃先はバルファルクの瞳を穿ち、小太郎はトリガーを引いた。



爆炎と血潮が舞う。

キャットとドッグが見上げる空の先で、小さな音が鳴った。本来であれば鼓膜を打つ爆音が余りの距離にほんの小さな残響のみが届く。それと同時に遙か宙へ向かっていた彗星が——ゆつくりと墮ちる。

「や、やったニヤ——」

「ばうッ！」

キャットとドッグが声を張り上げ、小太郎がバルファルクを仕留めたのだと確信する。しかしはっと目を見開くと、ドッグはキャットの前足を叩く。

「あ、あそこからどうやって戻って来るにや!? あんな高さから落ちたらっ、旦那様ミンチになるニヤ！ キャット、墜落地点へ急ぐにやあああ！」

背に乗り、急げ急げと横腹を蹴とばすドッグ。キヤットは一つ吼え
ると全速力でバルファルクの墜落地点へと駆けた。

「——う」

一方、至近距離で竜撃砲を撃ち込んだ小太郎は先の負傷もあつて一
瞬意識を飛ばしていた。凄まじい浮遊感に目を覚ました小太郎は、自
身がバルファルクと共に落下している状況に気付く。一瞬パニック
になりかけるも、かなり高度を上げていた事が幸いした。未だ地面は
遠く、猶予がある。

それでも落下速度を考えれば然程余裕はない。

——こんな所で、死んで堪るか……！

バルファルクの頭部に差し込んでいた苦無、鉄糸を解除し抜き放と
うとする。しかし緊張からか、がちがちに固まった掌が動かない。苦
無は強く突き刺さり、握った拳は微動だにせず。宙は酷く寒く息苦し
い。早く、早くと鳴らされる警鐘に背中を押され、何とか引き抜いた
苦無を手放す。そのまま頭部を蹴り飛ばせば小太郎の体はバルファ
ルクから離れ、巨体は独りでに地面へと吸い込まれていく。

間を置かずしてバルファルクは地に衝突し、赤い華が咲いた。

地面が、近い。

「頼むッ！」

ガンランスを背負い、両手に糸を巻き付け翔蟲を飛ばす。落下して
いた肉体は急激に減速し、両腕が軋んで思わず呻き声が漏れた。

しかし、辛うじて間に合った。地面に足が触れると同時に、糸を手放
して地面を転がる。砂塵を撒き散らして地面に這いつくばった小太
郎は、飛び散ったバルファルクの血に塗れながらも五体無事。荒い息
を繰り返し、地面に衝突して肉塊となったバルファルクを呆然と見
る。頭部は竜撃砲によって破壊され、全身は地面に叩きつけられた衝
撃で折れ曲がっている。

討伐したのだ——自分が、自分たちが。

「だ、旦那様ア！……無事ですかニヤア！」

「バオッ！」

「あ、ああ……」

駆け寄って来たオトモに気のない返事をしつつ、小太郎は膝立ちになる。実感が湧かなかつた。生存し、途轍もない偉業を成し遂げた筈なのだが、どうにも歓喜よりも疲労が勝る。思わず溜息を吐き、尻餅をつく。

必死になっていた為に気に留めていなかった全身の痛みがぶり返してくる。手足や腹の鈍痛が、今だけは生の実感として機能していた。

「生きている……よな」

よもや飛竜と共に空を泳ぐ事になろうとは思わず、死闘からの大空ダイブに精神が追いついていない。擦り傷だらけの肌を撫で、固まった血を爪で剥がす。小太郎の傍に駆け寄ったドツグが器用に傷の具合を確かめている。その忙しい動きを見つめながら、小太郎は背を丸めた。

「にゃあ、旦那様は生きていますニャー！　こんな大物、まさか本当に狩猟出来るなんて……天晴見事ニャー！」

「ははは、こりゃあ、フゲンさんに特別報酬を強請らないと」

乾いた笑い声を上げながら、小太郎は少しだけ気力を取り戻した。じわじわと内側から、成し遂げた達成感と自尊心が湧いてくる。そうだ、勝った、勝ったのだ。担いでいたガンランスを手に杖代わりにして立ち上がる。潰れたバルファルクを一瞥し、少しだけ得意げな顔で。

「よし——里に戻ろう、断定は出来ないけれど異変にこのバルファルクが関わっている可能性が高い」

「にゃあ、凱旋にゃー！」

キャットが小太郎の足を鼻先で突き、そのまま自身の背中を見る。乗って行けという事だろう、正直自分で歩くのも億劫に感じる程だった。有難い、小太郎はそのままキャットの背中に手を掛け。

音がした。

何か、空気を裂く様な落下音。披露した肉体で、億劫そうに音の聞こえる空を見上げれば。

影が宙から降って来た。

爆音、衝撃、礫が小太郎達の肌を打ち、体が急激に冷え込む感覚。

それは着地、というよりも【着弾】という表現が正しいだろう。バルファルクの突進に負けず劣らずの衝撃、しかし問題なのは——影に翼が存在しなかった事。

凄まじい轟音と地鳴りを巻き起こしながら、一つの影がバルファルクの頭部を踏み砕いていた。骨肉の碎け潰れる音、巻き起こる砂塵、足元から感じる確かな揺れ。

全員の意識、その間隙を縫った襲来。誰一人として言葉や音を発する事が出来ず、ただバルファルクの頭部を粉碎し、血に塗れた影に視線が集まった。

血霧を裂き、赤い瞳で小太郎を射貫く——人型の何か。

確信があった訳ではない、知識があった訳でもない。けれど確かに、目があった瞬間理解した。

伝説とは——こういう規格外を示すのだと。

ほんの十三尺——四百センチ前後のモンスターが、余りにも強大に映った。

外見は——マガイマガドに通じるものを感じる。甲冑、鎧、人が造り出した人工物を外殻として着込んでいるかの様。人型だからこそ、余計にそう感じてしまう。頭部には特徴的な一本角。兜を貫く様な形で存在するそれは伝承に存在する【鬼】に酷似している。総じて見た事も聞いた事もないモンスター。否、これをモンスターと呼んで良いのかも小太郎には分からない。

不意に影が消える。目を離れた覚えはなかった、しかし気付いた時には既に振り被った拳が迫っていた。小太郎の二倍以上の背丈、しかしモンスターと比較すれば小柄。

だというのに小太郎は、飛来する拳にバルファルクの突進を幻視した。

左右に居たオトモを後方へ蹴り飛ばし、咄嗟にガンランスの展開装甲で受けた。

風を切り、装甲に叩きつけられた拳は。火花を散らし、表面を拉扯させ、小太郎の踵を地面に減り込ませた。

重い——等という言葉では足りない。

呻き声ひとつ上げられず、小太郎は自身の肉体から異音が鳴り響くのを聞いた。骨や筋繊維といったものが、たったの一撃で、装甲越しに破壊される。目前に広がる装甲が飴細工の様に拉げ、小太郎の足元が沈む。どろりと、小太郎の全身から脂汗が滲んだ。

痛みからではない、恐怖からでもない——それは確信だった。

戦えば、負けて死ぬ。

「キヤット、ドッグ、行けエツ！」

「にやッ——」

「バウツ！」

決断は一瞬。二人に向かって血反吐を吐く想いで叫ぶ。かたかたと、武器を掴む小太郎の腕全体が震えていた。

「旦那様、何をッ!？」

「里にコイツの襲撃を知らせろ！ 今分かった、周辺の狩猟環境が乱れたのはバルフアルクが原因じゃない——コイツだッ！」

装甲越しに光る紅、無機質染みたそれは小太郎のみを射貫いている。とてもではないがマトモではない。拳から伝わる力量も、此方を見抜く眼光も、全身を押し潰さんと放たれる圧力さえも。

後方へと押し出されたオトモ二匹が叫ぶ。

「二人では無理ニヤッ！」

「全員で掛かっても同じだ！ 良いから早く行きやがれえエツ！」

「ッ………！ 武運を——」

葛藤は数秒、ドッグが悲壮そのものと云える表情を浮かべキヤットに跨った。本能的に小太郎が云っている言葉が正しいと理解したのだ。一人では勝てない、二人でも勝てない、三人纏まって仕掛けても——尚、勝てる未来が見えない。

対峙する事そのものが敗因。小太郎と共に数多の死線を潜り抜け

て来た二匹の本能は、小太郎と同じ決断を下していた。そうであるのなら最善はなにか？ フクスクのみでは伝えられない狩猟対象の情報を持ち帰る事。対象の数、姿形、力量、能力、それらを余すことなく全て。里の防衛設備で以て迎え撃てば或いは、そうでなくとも里には小太郎を凌ぐ実力者が詰めているのだ。

このモンスターを無防備な里に近付けてはならない、絶対に。

例えそれが——風魔小太郎という狩人の生命を対価としても。

小太郎の使命は此処で足止めに徹する事。

カムラの里を守る事。

その達成に「風魔小太郎は必要ない」。

キャットとドッグのオトモ組が狩猟区域を離脱していく。背を見せて逃げる獲物を追わず、小太郎だけをじつと見つめているモンスター。小太郎は辛うじて支えていた拳圧を横に反らし、そのまま後方へと下がる。たった一度、攻撃を防いだだけで小太郎の両腕は小刻みに痙攣していた。先程まで立っていた場所を見れば、足の形に窪み凹んだ地面。ゆつくりと呼吸を整えながら対峙するモンスターを見る。

「人型のモンスター……新大陸の方で目撃例はあったな」

何でも人型の樹と称されるモンスターだったらしい、これもその類かと疑る。果たして自分は勝てるのか。小太郎は思う、自問自答する必要すらないと。ドッグは「武運を」と云った、しかし口にしたドッグ自身、信じてはいないだろう。

勝ち筋が全く見えない。

どんな相手であつても、百分の一、千分の一、或いは億分の一の確率で勝てる確率は見える。里長のフゲン、ウツシ教官、ギルドマスターのゴコク、どれもこれも里の誇る英雄豪傑、真っ向から小太郎が戦えば叩きのめされて終わる相手。それでも、ほんの僅かな可能性は存在する。勝利の可能性は零ではない、どれ程低く気の遠くなるような攻防の果てであれ、「絶対に勝てない」と断念する相手ではない。

しかし、この相手には——それが無い。

百、千、万、挑んだとして一度も勝ちを拾える未来が見えない。戦えば戦った分だけ、挑めば挑んだ分だけ、自身が敗死する未来が広

がっている。

小太郎が今生、その未来を見たのはたったひとり——たったの一人だけだ。

つまりそれは、目の前の存在が彼女の領域に足を踏み込んでいるという証左に他ならない。

勝てる訳がない、小太郎の冷静な部分がそう云った。

けれど退くという選択肢も存在しなかった。

故に小太郎は静かに武器を構えるのみ。

「上等だ、付き合ってやるよ……！」

吐き出した言葉は強がり以外の何物でもない。

不意に風が生まれる。それは瞬く間に嵐となり、小太郎を含む狩猟全域を覆い隠した。先ほどまであれ程に晴れ渡っていた空が暗雲に呑まれ、雷鳴が轟く。狩猟環境の急激な変化——古龍と呼ばれる存在は天候すら操ると耳にした事がある。

これで逃げる事も出来なくなった。ただ静かに覚悟を決める小太郎。

絶望的な戦闘が始まろうとしていた。



カムラの里に緊急招集が掛かった。本来であれば百竜夜行が襲来した際に掛かるそれが平時に、それも何の予兆もなく。広場に集まって村人達の前に里長であるフゲンが立つ。太刀を片手に階下の面々を眺めた彼は、「既に凡その事態はフクズクにて告知されている事だろう、時間がない、手短に話す」と結んだ。

「調査任務に出ていた小太郎のオトモより、【新種のモンスターと遭遇、伝説位と判断、襲撃を受けやむを得ず交戦、敵モンスターの脅威は甚大、逃走不可能】との報告があった」

「！ 新種のモンスター」

村人達の間でざわめきが起こった。何やら里の近辺で生態系の異常が発生しているらしいという噂程度は知っていたが、彼ら、彼女らからすれば寝耳に水。あの小太郎が脅威甚大と報告する程の怪物、ざわめきは波となって伝搬する。

「——ギルドはこの新種のモンスターを仮称として【餓鬼】と命名、この異常事態に対し、我等カムラの里は」

「待って下さい」

フゲンの言葉を遮る形で、群衆の中から声が上がった。視線を向ければミノトが急行して来たのだろう、息を切らせながらフゲンを睨みつける様にして見据えていた。一步、群衆より踏み出した彼女は問いかける。

「小太郎は——どうするのですか」

「……該当狩猟地帯には強力な嵐が吹き荒れ梟が飛べぬ、ギルドの飛行船も然り、現状内部を窺い知る事叶わず——小太郎が生きているかも分からぬ」

フゲンは一言一言を噛み締める様に、目を閉じ告げた。

「生死不明、ギルド側はそう判断を下した」

「——」

その一言にざわめきを含んでいた広場は一気に沈黙に包まれた。生死不明、何と絶望的な字面か。ミノトは僅かに肩を震わせ、何かを口にしようとする。しかし自身を見下ろすフゲンの瞳に気付くと、吐き出そうとしていた言葉を飲み込んだ。

代わりに両手を強くに握り締め、そして何も言わず踵を返しギルドへと向かう。

「何処へ行く、ミノト！」

「決まっています、小太郎を——」

「ならぬッ！ 小太郎をして【甚大】と云わしめる脅威、単身で出向くなど……」

「——あらあら、独りではありませんわ、里長」

声は丁度、ミノトが向かおうとしていたギルドの中から。金属同士の擦れる音、それらを引き連れランスと弓を担いだヒノエの姿。「姉様！」とミノトが駆け寄れば、彼女は微笑みを浮かべながら担いだランスを手渡し、二人を見下ろすフゲンを真っ直ぐ見据えた。恐らく、彼女も救援に赴くつもりだったのだろう。背囊と愛用の弓を担いだ彼女の姿は殺気と闘志に満ちていた。

「姉様、やはり」

「当然、救助に向かいます」

普段の温厚な表情、その中に刃物の様な鋭利さを孕んでいる事にフゲンは気付いた。片手に持った太刀を強く握り締め、口を開く。

「ヒノエ、よもや」

「私たちは元より二人で一人——伝説位、何するものぞ」

弓の弦を張り、指先で弾く彼女は告げる。自分達の力があらゆる困難を乗り越えられる程に強大であるとは驕っていない、しかし二人ならば、ヒノエとミノトという片割れの存在があるのならば。どれ程の存在であろうと、例え伝説と呼ばれる存在であろうと——打ち勝てると信じている。

何より風魔小太郎という存在が危険に晒されている状況で何もせず動かないなど、出来る筈もない。

「里一丸となって挑む以上、これは百竜夜行と同義、我々が打って出ても構わぬでしょう」

「敵が一匹ならば知れた事、里に近付く前に排除します」

各々の狩猟武器を手に、二人は断固とした口調で告げた。フゲンは口から息を吐き出し暫し目を閉じ沈黙を守る。その動向を村人全員が見守っていた。ややあつて、彼は太刀の鏢を親指で弾き一度鳴らす。

「……ウツシ」

「此処に」

「備えは」

「警邏と守衛は直ぐにでも、しかし敵の脅威度合いによっては不足かと」

「供廻りを呼び戻せ」

「宜しいので？」

「二度は云わぬ、後詰めと編成を急がせろ」

「——承知」

背後に音もなく現れたウツシと短くやり取りを済ませ、フゲンは閉じていた瞳を開く。その双眸を真正面から見返した二人は静かに問

うた。

「先遣隊として認めて頂けるので？」

「止めた所で止まるまい、立ちほだかるならば殴り倒してでもという
気概が透けて見える」

「生憎、性分ですのう」

「ならばもう止めぬ——だが約束せよ」

重々しい音が鳴り響く。フゲンが鞘で石床を打った音であった。
瞳から放たれる重圧に、常人であれば竦み上がる程。しかしこの場は
カムラの里なれば、常在戦場を地で行く者共にとつては微風に等し
い。

「逸るな、お前たちの役目は足止めと救援、小太郎を救えたのならば即
座に撤退せよ、無理ならば生存を第一とする——本隊到着まで無理な
攻勢は控えよ」

「……承知致しました」

「それと、万が一小太郎が殉死していた場合は」

そこまで口にしたフゲンを前に、姉妹は手を突き出して遮る。全く
同時に、最初からそうする事が当然の如く。

「それはあり得ません、だって——」

最愛の危機、けれど——彼女達は微笑みを浮かべていた。

「私たちの小太郎ですもの」

弟が姉に勝てる筈がない

睨み合った状態からガンランスを振り上げる小太郎。

しかし途端に全身を襲う悪寒、咄嗟に防御を固め——吹き飛ばされる。盾代わりにした手甲が砕け、凄まじい衝撃が腕全体を貫いた。圧力が肺を叩き、地面の上を転がった小太郎は蟲糸を手繰り寄せて体勢を立て直す。

「ごほッ、かつ……！」

速い、初速がまるで追えない。

バルファルクの様に予備動作、一瞬の溜めすら存在しない。気付いたら目前で腕を振り被っている。人間と姿形は酷似している、しかし腕が四本——注視すべき箇所が二ヶ所多い。

「はっ……阿修羅像みてえな奴だ」

吐き捨て、腕に巻き付いた糸を引っ張る。モンスターの背中より生え出た一本に巻き付いたそれは、殴られた瞬間に巻き付けていた翔蟲の糸。

「人型ならこういう使い方も出来るだろう！」

翔蟲を手繰り、腕を中心に体へと糸を巻き付ける。腕を抱え込むようにして簧巻きにされたモンスターは一瞬の妙手に硬直する。これは師であるウツシより学んだ蟲糸術——ではなく、己の姉妹より何度となく掛けられた故に習得した技。貞操を犠牲に体感したそれは常人であれば行動不能、カムラの里が誇る狩人であっても数十秒は抜け出せぬ鋼の檻。

糸を地面へと打ち込んだ小太郎は飛び上がり、モンスターの頭上より強襲。外殻の隙間、頸元にガンランスを突き込み、トリガー。

しかし小太郎の予想に反し、愛器は硬い金属音のみを鳴らし不発。

「ッ!」

見れば銃身が曲がり、増設装甲さえも拉げていた。脳裏を過るのは出会い頭の攻防、一撃を装甲で受けた瞬間の事。あの一撃で装甲ごと機構が潰されたのか？ 元より何度も防ぐ事を考えて設計されては

いないが、たったの一撃で。

はっと、小太郎の意識がモンスターに向く。彼奴の面頬が開き、空気を吸い込む異音。咄嗟にモンスターの肩を蹴とばし、離脱。次の瞬間鳴り響く爆音、衝撃波が小太郎を吹き飛ばす。同時に鉄糸も霧散し、淡い残滓が虚空を漂った。

震わせた空気を裂き振り上げられた拳、咄嗟にガンランスを盾にしようとして。

受けるなッ！

本能が警鐘を鳴らした。翔蟲を手繰り寄せ、辛うじて空中で回避する。そのまま地面の上を転がり、一拍遅れて拳が地面を抉り飛ばす。飛沫が雨の様に降り注ぎ、小太郎は荒い息を繰り返した。抉れた地面を見て怖気を覚える。直撃すれば肉塊だった。

地面を殴り震わせたモンスターは微動だにせず、ゆつくりと顔を上げて小太郎を見据える。その動きはどこまでも不気味で、悍ましく――無機質。

「……実は絡繰り人形だったりするののか」

緩慢な動作で立ち上がるモンスター。小太郎はガンランスから素早く弾薬を抜き捨てる。最早、銃槍としての役割は果たせない。暴発の可能性がある以上、只の槍としての運用が望ましい。

小太郎は冷汗を流しながらモンスターを観察する。頬を撫でる水滴が煩わしく思えた。

人間に酷似した体形、鎧を象った外殻、怪力の四本腕。まともに攻防を行おうとしても脚力、腕力、瞬発力、全てに於いて己を上回っている。外殻の硬さは接触時の感覚からして飛竜の鱗と同等かそれ以上、少なくともまともに刃が通ると思えない。そうなると外殻で守れない箇所には刃を差し込む必要がある、そして砲撃が行えない以上――狙うべき箇所は更に限定される。

頸、眼球、脇下、股。小太郎はガンランスを構え直し、ゆつくりと息を吐き出した。

対峙したモンスター、その面頬が再び音を立てて開く。

――奥から光が見えた。

「――」
殆ど反射だった、思考などない。ただ彼奴の口元から見えた光に、確かな【死】を見た。咄嗟に射線上から逃れ、屈む事が出来たのは奇跡だった。屈んだ瞬間、頭上を何か、凄まじい熱量が通り過ぎ周囲を薙ぎ払った。熱波が肌を焼き、閃光が網膜を焼く。地面に這いつくばったまま必死に目を開き、極光の行方を驚愕の表情で見つめる小太郎は思わず叫ぶ。

「^{プレス}火炎……!?! いや、これはッ」

放射の反動でモンスターの頸が後方へと逸れ、放たれた極光は岩場と幾つかの樹々、そして天を揺蕩う雲を引き裂き、徐々に虚空へと消える。後方を見れば一部の水面はマグマの如く煮えたぎり、岩場はぐずぐずに溶け抉れていた。直撃したのであろう崖の一面など特に酷い、採掘機か何かで抉ったかのような地形の変化。その表面が焼け爛れていなければモンスターの仕業である等と信じられまい。

大技を放ち終えたモンスターは外殻の隙間から蒸気を噴き出し、再び小太郎に向き直る。

——こいつを相手に距離を離したら死ぬ。

もう一度、今の攻撃を避けられる自身は無かった。クロスレンジでやり合えるだけの自信はない、しかし距離を離せば今の攻撃がもう一度飛んでくるかもしれない。そう考えれば選択肢はなかった。

ガンランスを握り締め駆け出す小太郎。二本の巨腕が迎撃に動き、目にも止まらぬ速度で振るわれる。

翔蟲を使って空中へ飛び上がり、振りぬかれた腕の一本を蹴った。目下で二つの拳が衝突し、小太郎を圧殺せんと轟音を打ち鳴らす。糸を掴んだままモンスターの顔を睨みつける小太郎、その瞳の向こう側に第三の拳。人間には存在しない、三本目の腕。

「ッ……!」

相手の背中越しに放たれた三撃、腕が四本あると頭では分かっているても肉体が対応し切れない。飛び上がった姿勢のまま強引に翔蟲を手繰り寄せ、三撃目を回避する。しかし続く四撃目、こればかりは如何ともし難い。足場もなく、手繰り寄せる糸もない。小太郎は腹を括

り握ったガンランスを構え、全力での刺突を繰り出す。振りぬかれた拳と繰り出された刃先が振れた瞬間、甲高い音と共にガンランスが持ち手を残して粉々に砕けた。

小太郎の頬を破片が裂き、拳が直ぐ脇を掠める。

予感していた結末、彼奴の硬度は尋常ではない、特に拳のそれは恐ろしい程に。それでもこうしなければ防げなかった。己の得物すら犠牲に捧げ、一撃即死の四連撃を凌いだ小太郎は握り締めたガンランスの柄を宙に放る。

「ぐッ、ハモンさん、ごめん……！」

思わず口をついた言葉と共に、呼び戻した翔蟲より糸を手繰り寄せた。蟲は左右に広がり小太郎は両手を繋ぐ細い糸、翔蟲の鉄糸をモンスターの頸に引つ掛け、そのまま背後に抜ける。

武器はなくとも——翔蟲の糸は強靱、相手が生物であるのならば。

「このまま首を押し斬ってやるッ！」

宙で身を翻しモンスターの背中側へと着地した小太郎。そのまま踏ん張り、両手を思い切り前へと引つ張る。翔蟲の糸は小太郎の両手首、そして五本の指に枝分かれして絡まり、ぎちりとモンスターの頸を締め上げる。小型のモンスターであれば首を千切り飛ばし、中型であつても環境次第では押し折る事も可能な蟲糸を使用した頸絞技。幸いこのモンスターの体格は小型、中型には届かずという具合。

「ッ………!?!」

しかし微動だにしない。寧ろ頸の力だけで小太郎の体が引き摺られる。

「こいつ、本当に生き物じゃ——ぐおッ!?!」

宙に浮かぶ体、そのまま力任せに地面に叩きつけられる。視界に火花が散る、そのまま見上げた視界の先に巨大な拳。頭蓋を砕く一撃を辛うじて躲し距離を取る。

額から垂れた血を拭う。

これ見よがしに突き出された拳、その中に小太郎が持っていた翔蟲の姿。そのまま握り潰され、零れ落ちる翔蟲であつたもの。

これで、蟲糸技も封じられた。

視界の端に転がる、持ち手だけとなったガンランス。残る武装は苦無と？ぎ取り用のナイフ程度。そのどちらも、あの甲冑の如き外殻を抜けるとは思えない。

——万事休す。

最早逃げる事も叶わない。

膝を着きたくなる絶望感に襲われる。

——愛弟子、武器を用いるのは良い、けれど武器を頼むのは駄目だよ。

不意にウツシ教官の言葉を思い出した。

一撃必殺の理想、己の構想したガンランスを手に入れた時の事だ。

「は……」

乾いた笑いが零れた。それは別段、諦めから来るものではない。

ゆっくりと両手を前に突き出す、徒手空拳の構え。

モンスターの爪と比較し何と頼りなく、何と小さな拳か。

それでも人間と云う種に残された最後の武器は、これ一つ、この肉体一つのみ。

「何が狩獵の役に立つかなんて、本当に分からないものだ」

対峙する二人。

瞬きの間にモンスターが動いた、バルファルクの突進に負けず劣らずの速度。顔面目掛けて振り下ろされた一撃を腕全体で逸らす。骨の芯まで痺れるような衝撃。即座に二撃目、半身になって避けた。拳を逸らした腕の皮膚が一拍遅れて裂ける。逸らした拳が地面に突き刺さり、飛び散った砂利が小太郎の肌を強かに刺す。

その砂塵に紛れ前傾姿勢になったモンスター、その兜の奥にある赤色目掛けて、小太郎は全力で指を突き入れた。

何かが潰れる音と共に、小太郎は指を引くと同時素早く後退。

拳を打ち下ろした姿勢のまま微動だにしないモンスター。

砂塵が晴れると——赤い瞳が小太郎を射貫く。

「……クソが」

脂汗を滲ませ、告げる。

突き入れた指二本、折れ曲がったそれを見る。

普通ではない、眼球の感触ではなかった。もつと硬い何か、石に指を突き入れた様な感覚。

通常ではあり得ない、こんなモンスターを小太郎は知らない。

薄々分かつていた、何となく感じていた。

この世界らしからぬ威容、技、立ち振る舞い。

この世界の代物ではない——その予感。

それは恐ろしい予感であった。同時に予想出来た事であり、今の今まで必死に目を逸らし続けていた真実でもある。

この世界がもし、己の知っている代物と同じ世界だとしたら。それは所謂——【歴史】の一つだと断定出来る。

正しい歴史、本筋、或いは本編、彼女がこの世界の主人公であり、その他取り巻く環境が真実、あらゆる『向こう側の人間』が知る歴史だとしたら。

自分は、この世界にとって異物である。

風魔小太郎と云う人間は、『正しい歴史』の中に存在しない。

少なくともゲームとして存在した歴史に於いて、メタ的な視点を持ちゲームのタイトルすら知っている登場人物など存在しないと彼は言い切るだろう。そんな存在が居たとしたら、興ざめだ。だからこそ、己はこの世界に於いて異物なのだ。既に異物が混入した世界が此処なのだ。

——ならば何故、他の異物が混じっていないなどと断言できるのか。

風魔小太郎という異物がこの世界に混じった様に。この世界の理屈に合わない存在が混じったとして、どうして否定出来るよう。

だからこそ備えるべきであった。だからこそ覚悟するべきであった。

唐突に、何の前触れもなく、それこそ己が想定も出来ない——そんな強大な怪物が現れる可能性を。

——己の汚点は、己が雪がなければならぬ。

風魔小太郎がこの世界に生まれた事で発生した不条理ならば、風魔

小太郎が排除しなければならぬ。異常には異常を、異物には異物を、汚点には汚点を。風魔小太郎と云う存在が生まれたが故に生じた変化ならば、その変化を正するのが小太郎の使命だ。

文字通り、命を使ってでも正さなければならぬ事だ。

——風魔小太郎は、己がこの世界にとつて異物であると腹の底から信じていた。

「う、っ、ふーッ！」

折れ曲がった指を無理矢理に握り締め、小太郎は口を窄めて息を吐き出す。

砂利で額が裂け、血が視界に滲む。それを拭う余裕すらない。

モンスターがゆっくりと拳を振り上げる。そのまま空気を炸裂させ、凄まじい速度で目前に迫る。一撃、二撃、攻撃を捌く度に皮膚が裂け血が飛び散る。無様に地面の上を転がり連撃を逃れ、腕だけでなく足や肩、身体全体を使って一秒を生き延びる。

愛用のガンランスは粉々に砕けた、翔蟲は握り潰された、眼球は石の如き硬さで、肉体の性能がそもそも段違い。もう受け流す事すら困難だった、その繊細な動きが痛みと疲労で出来そうにない。

疲労と痛みで動きが一瞬止まった。間隙を突き、放たれる剛腕。

受ける——否、防御の上から潰される。

故に愚直に、迫りくる甲鉄の拳に対し己の拳を構え——真つ直ぐ振り抜いた。

破碎音と共に衝撃が走り、空気が爆ぜ、足元の砂利が跳ね上がった。

「がアああッ！」

目前で衝突した二つの拳。片方が赤に塗れ、片方は依然として健在。拳が砕けたのが分かった、凄まじい鈍痛に顔が歪む。しかし、彼奴の拳は止まっていた。

カムラで育ち、鍛えられた肉体は伊達ではない。その筋肉、骨密度、血管の細部に至るまで既に人間としては規格外。純粹なカムラ人にこそ及ばぬまでも、飛龍を拳ひとつで粉碎せしめるモンスターと鏢迫り合いを演じられる程度には強靱であった。

「っ、ぐ、がアああ……！」

痛みは意志で、負傷は気概で無視する。剥き出しになった血肉、拳を止めた小太郎は相手の突き出した拳に飛びつく。そのまま足を肩まで絡ませ、関節を逆に思い切り引き絞った。滴る血が肌を伝い、強靱なモンスターの関節が軋みを上げる。打撃戦は完敗だ、小太郎は拳でこの外殻を破れないと認めた。

——だが、柔術であればどうか。

「腕のツ、一本……！」

腕ぎ取ってやる。

関節を軋ませながら、小太郎は腰のホルスターから剥き取り用ナイフを取り出す。そのままモンスターの脇下に突き立てようとして。

しかし、その一撃は届かない。

横面目掛けて飛来した拳が、小太郎の頭蓋を強かに殴打したのだ。そのまま吹き飛ばされ、地面を二度、三度と跳ねる。着弾の瞬間、余りの衝撃に意識を飛ばした小太郎は、地面に叩きつけられる瞬間に覚醒し、四つん這いの恰好で滑りながら減速。手から離れたナイフが音を立てて地面を転がる。

頸を引っこ抜かれたと思う程の衝撃だった、思わず自身の手を頸に当て頭が繋がっているかどうか確かめる。

殴られた頬は痛いというより熱い、鏡を見る事が怖かった。

視界はどうか——両目とも健在、しかし右耳がややおかしい。平衡感覚も、どこか覚束ない。這いつくばったまま視線を上げれば、拳を振り抜いた姿勢のまま此方を凝視するモンスターの姿。当然だが傷一つない。一秒あれば関節を破壊する自信があった。しかしそれを上回る、否、それ以上の恐ろしい反射速度で拳を振り抜いて来た。

小太郎は己の失策を悟る。この期に及んで己の尺度で相手を測っていたと。

辛うじて肉体を支える腕は左右に震えて止まらない。殴りつけた右腕は半ばまで砕け、指などあらゆる方向に捻じれ狂っている。

不意に、小太郎の中でどろりとした感情が沸き上がった。それは酷く冷たく、寒々しい気配を発していた。

——一矢報いる事さえ、己は出来ないのか。

それは諦観。風魔小太郎という人間が今世、最後の最後まで抱いてやるものかと思っていた感情だった。しかし、それも仕方がないと小太郎は自身に言い聞かせる。もう立ち上がる気力すら絞り出せず、膝も腕も笑って仕方がない。今世、絶対であると信じていた決意が溶けていく。痛みというのは偉大だ、重なれば重なる程に強固であった筈の感情が掻き消されていく。

このまま安らぎの中に沈んでしまいそうになる。けれど。

「かアツ……！」

小太郎は思わず歯を痛い程に噛み締めた。

血塗れの拳で、血塗れの膝を殴打する。剥き出しの歯茎から滲みだす赤、それを吐き捨て声なき叫びを上げる。

諦めなど、諦観など——風魔小太郎という人間が、最も抱いてはいけない感情だ。

使命を果たすと誓った、カムラの里を守ると誓った、届かぬ星に手を伸ばし続けると誓った。

あの日、あの時、己に誓った約束は絶対であった筈なのだ。

例えその末路が、惨めな最期だったとしても。

愚かで、無様で、無惨で、直視に堪えない結末だったとしても。

それでも——あの白に沈む記憶に比べれば笑ってしまう程に恵まれていた。

小太郎は辛うじて動く左腕を装具の中に滑り込ませ、覚束ない指先で三つの丸薬を摘み口の中に放り込む。ごり、と苦みすら感じずに下に絡めて噛み砕き飲み干す。口の中も血まみれで、味など少しも分かんなかった。放り込んだ丸薬はそれぞれ「怪力の丸薬」、「忍耐の丸薬」、「秘薬」と呼ばれる代物。怪力の丸薬は一時的な筋力の増強、忍耐の丸薬は痛みに対する鈍化、秘薬は一時的な止血、回復に用いられる。

小太郎が普段使わない、狩猟用薬物。人間の筋力を著しく強化する、痛みに対する耐性、強制的な回復。無論、身体に良い筈がない。カムラの里をして、「秘薬」と表現するには相応の理由がある。

砕けた指先がぴくりと震えた、胸の奥から湧き上がる熱としか表現できないそれ。口を膨らませ、口内に溜まった血を吐き出す。腫れあがった指先を緩く握り、呟く。

「……もし、自分が勝てないようなモンスターと遭遇したら」

もし、予想以上の規模で百竜夜行が起こったら。

もし、絶対に負けられない状況で複数のモンスターに囲まれたら。

もし、想定出来ぬ程の脅威を持つモンスターが現れたら。

小太郎は碌な狩猟道具を持たない。罾や罟など、嵩張るものは防衛戦等近辺かつ地形を熟知している場所では使わない。しかし、そんな小太郎が肌身離さず、必ず全ての任務に持ち込んでいる狩猟用道具がある。決して軽くはないしバッグスペースも取る、しかしそれは万が一に対する奥の手で在り——自身の背後に在る里を守るために小太郎が切れる、生涯最後の切り札であった。

ガンランスの弾薬が詰まった弾帯に絡めた、それを小太郎は見せつける。

小樽爆弾に酷似したそれは通常のカクサンデメキンに厳選火薬草、バクレツアロワナの体液、特殊個体の爆破エキスを圧縮調整した特製爆弾である。グレートの名を関するそれよりも遥かに破壊力に優れたそれは、「滅竜砲」の小型爆弾化を指した果ての成果物であった。

この小樽爆弾一つで、強固な外殻を持つバサルモス一体を消し飛ばす事が出来ると云えば威力は知れる。しかし、対価もまた相応。強大な破壊力を持つが故に起爆は必ず手動、誘爆が発生しないように外装は強固、そして何より値段が笑えない。これ一つで小太郎の五年分相当の報酬が消し飛ぶ。

しかし——故に信頼性は絶対。

「ケホッ……どんなに弱い人間でも、格上に一矢報いる方法を知っているか、モンスター」

小太郎は最早立っているのも困難な肉体で、一步、一步と彼奴に近付く。棒立ちのまま小太郎を見下ろすモンスターが何を想っているのかは分からない。しかし、小太郎にとっては好機。否、今この瞬間、相手が何をしようが、文字通り小太郎を殺害しようが関係はない。特

製爆弾に括り付けられていた誤爆防止蓋を引き？がし、丁寧に収納されてきた発火紐を引き抜く。

瞬間、樽の内部から火の点く音が聞こえた。底辺に収納された導火線、その長さ、猶予は五秒。

「――自爆だ」

瞬間、残り全ての力を絞り出す。

地面を蹴り碎き、増強された筋力で以て肉薄。モンスターが反応し、ノーモーションで繰り出された拳を辛うじて避け、追撃の二撃目を蹴りで逸らす。接触した瞬間に足甲が碎け、衝撃で骨が軋む。頭上から飛来する第三、第四の腕。第三撃を碌に動かない右腕を盾に、第四撃を『額』で受ける。

凄まじい衝撃、鈍痛、意識が飛び痛みで覚醒する。右腕が拉げ、頭蓋が潰れたと錯覚する程の一撃。両足が僅かに沈み、身体全体が仰け反った。

それでも生きている、死んでいない、懐に潜り込んだ。手を伸ばせば届く距離、頸が軋み血塗れの口を笑みで彩る。

左腕に抱え込んだ爆弾を、彼奴の顔面に向かって下から放る。赤い瞳がゆつくりと飛来するそれを追った。

「お前は此処で――俺と死ぬ」

眩きは、爆音に掻き消され途切れた。

■ 爆炎が掻き消える。

強大な炎はあらゆるモノを焼き尽くし、衝撃波が宙を貫いていた。円型の窪みと溶け落ち、焼け焦げた大地が全てを物語る。白煙が辺りを覆い隠し、爆音の後に訪れるのは痛い程の静寂。風魔小太郎の切った最後の札は、正に彼の奥の手と呼ぶに相応しい。

抉れ、焦げ付いた大地は飛竜のブレスが直撃するよりも遙かに深く、広い傷を刻んでいる。立ち上る蒸気は熱量の現れ、凡そ人が造り出した兵器の中で持ち運び可能な部類では一等強力な威力、その証明。

その白煙の中で、モンスターは静かに構えを解いた。

外殻は所々煤けており、場所によっては亀裂も見える。しかし、未だ健在——致命傷には程遠い。否、伝説に匹敵する強固な外殻を表面とは云え焼き、罅割れさせただけでも凄まじい戦果というべきか。静かに四本の腕を下ろし、僅かに落としていた腰を上げ直立する。その視線の先には——ぴくりとも動かなくなつた、風魔小太郎だつたものが横たわつていた。

「……………」

滅竜砲の威力を再現しようとした成れの果て——その言葉に偽りはない。

あらゆる攻撃を弾く彼の外殻を破損させる程の威力、それを生身の人間が受ければどうなるのか、想像に難くない。それどころか原型が残っているだけでも僥倖。

もう、この生物は死んでいる。手を下すまでもない——そう判断した視界の中で。

その指先が、微かに動いた。

「——」

思わず、と云つた風にモンスターの肩が揺らぐ。

白煙を引き、爛れ、引き裂かれた皮膚をそのままにゆっくりと立ち上がる風魔小太郎だつたもの。まるで頭上から何か、見えない糸で引っ張られているかの様に。彼は緩慢な動作で立ち上がると、徐に自身の両腕を眺める。

血に塗れ、塞がった片方の眼球がぎよろりと動いた。そして小指から順に拳を作り、呟く。

「片手剣」

声は小さく、しかしはつきりと虚空に響く。途端、頭上から影が落ちる。小太郎は最初からそうなる事が分かつていたかのように、落下する影——小剣と盾を掴み取つた。

モンスターが空を仰ぎ見れば、フクズクが嵐を物ともせず飛行している。

見ない影だつた、少なくともモンスターにとっては。風魔小太郎が使役しているフクズクは、既にこの戦闘をオトモと共に離脱している

筈なのだから。

「……………」

盾を腕に通し、剣を握った小太郎は無機質な瞳でモンスターを見る。満身創痍、四肢は勿論顔面、背中、腹、腰、ありとあらゆる場所に血がこびり付き、折れ曲がり、砕け、拉げ、凡そ歪な人型と称する他ない。片手剣を握る指は親指を入れて三本、小指と薬指があらぬ方向を向いており、何より酷いのは火傷痕。

顔面と頸元、胸から腕にかけて半身の皮膚が爛れ落ちている。自爆特攻のダメージ——否、あれだけの爆発をこの程度で済ませている時点で異常なのだ。モンスターは罅割れた外殻をなぞり、思考した。

小太郎の血で塞がった片目が、ゆっくりと開く。

ぞくりと、モンスターの背中に氷柱を突き入れたかの様な怖気が走る。

瞬間、小太郎の腕から翔蟲の糸が伸びる。糸はモンスターの頸元に巻き付き、小太郎の体が一気に肉薄した。まだ蟲が残っていたのか、モンスターは咄嗟の強襲に驚きながらも、しかし冷静に対応する。

カウンターの要領で拳を振り抜く、否、拳を置くだけで良い。凄まじい勢いで飛来する小太郎は己の出した速度で拳に当たり、自滅する。

そう判断し、即座に打ち出される甲鉄に勝る拳。しかし、拳でなぞった軌道に小太郎の姿がない。見れば接敵の寸前で糸を自ら手放し、そのまま懐に潜り込むような形で地面を踏みしめ減速。小太郎の背後に出来る電車道^{二本線}。

光の無い瞳がモンスターを見上げた。

盾を腕と垂直に、腰を落として足腰を十全に扱う構え。二匹目の翔蟲が頭上に飛ぶ。思わずモンスターが拳を振り下ろすと同時、衝撃は来た。

振り下ろされたモンスターの拳に合わせて、翔蟲と足腰を利用した強烈なシールドバッシュ、それも上方向に向かったの。

——滅・昇竜撃。

カムラの里、片手剣を扱う者であっても習得困難と云われる奥伝の

一つ。

大地を蹴り上げた力を足、膝、腰、肩、腕の連結で余すことなく盾に伝え、其処から蟲糸を利用し上方に回転を加えながら叩き込むという技巧。更に相手の攻撃に被せカウンターとして放つ事で相手の攻撃を逸らし、無防備な顔面に十全の一撃を叩き込む事が出来る。

元は飛来する竜を盾一つで叩き落したという伝説の狩人が用いた代物。

実際に片手剣を愛用する香は、この技でリオレウス希少種の頸を物理的に消し飛ばした実績がある。

カムラの里が誇る奥伝の一つは、強烈な一撃を齎した。

打撃はモンスターの顔面、顎を直撃し凄まじい衝撃と金属音を打ち鳴らす。どれ程の攻撃であつても決して動じなかつたモンスターが二歩、三歩と踏鞴を踏む。面頬に似た外殻が罅割れ、欠けた。

飛び上がった小太郎は反動をそのままに鉄糸をモンスター目掛けて投擲。先端に苦無の結ばれたそれらは腕や頸、足に絡みつき地面へと打ち込まれる。撃ち込まれた鉄糸はものの一瞬で六点——しかしモンスターにとつては十分ではない。ほんの二秒、拘束出来た時間はそれだけ。

しかし、その二秒が風魔小太郎にとつては黄金に勝る時間。

拘束され、身動きが取れなくなつたモンスターに刃が飛来する。それは小太郎が空中で鉄糸と同時に投擲した得物。柄に蟲糸を繋ぎ、宛ら鞭の様に扱う小太郎第二の刃。飛来したそれはモンスターの外殻を裂き、関節近くの肩口に突き刺さる。しかし深手ではない、鉄糸を煩わしいとばかりに振り払つたモンスターの耳に眩きが聞こえた。

「起爆」

瞬間、モンスターの肩が爆ぜた。

外殻が内側から吹き飛び、モンスターの姿勢が大きく崩れる。溶け落ちた外殻に火薬の臭い、思わず傷口を抑えたモンスターは蟲糸によつて淡い残滓を残しながら小太郎の元に引き戻される剣を見る。

その刃に塗布された——爆破エキス。

飛び散つた外殻の破片を踏み砕き、爆風を避けるために距離を取つ

ていた小太郎が迫る。朦々と立ち上る煙を裂き、モンスターは四本の腕を広げた。

この人間は——危険だ。

生存本能が叫ぶ。四本の腕がそれぞれ独自に蠢き、次々拳を振り下ろす。一、二、三、四、瞬く間に練り出される四連撃、風を切り喰る拳は直撃すれば人の骨を砕き肉を裂く。それを小太郎は身を以て理解している。

人は傷を忘れない、一度味わった痛みは恐怖という形で体に刻み込まれ、いざその恐怖と対峙すれば筋肉が強張り精神が乱れる。痛みとは教訓だ、知っているからこそ委縮するのだ。

だと云うのに——いつそ芸術的なまでに無駄なく、涼し気に、風魔小太郎は拳を逸らし、弾き、躲し、踏み越える。剣を振り上げ、モンスターは拳を足場に飛び上がった小太郎は切っ先を頸元へと向ける。宙に浮かぶ人間を見る。その顔には恐怖も、興奮も、苦痛も、歓喜もない。唯々能面の如く冷徹で、無感動で、無感情で。

これは成長か——モンスターは己に問う。

否、成長等と云う生温い代物ではない。

この風貌、戦い方、精神性、全てが以前とは異なる。がらりと中身が変わったかのような、その在り方が瞳の昏さ、表情として滲み出ている。『生物』として何かが、何かが決定的に【間違っている】。

これは、変質だ。

「肉質確認」

放たれた刺突。がちんと、剣の切っ先がモンスターの頸元を穿つ。外殻の間隙を縫った一撃は確かに中程まで刃を埋めモンスターに損傷を与えた。呻く、低く苦悶の声、しかし、それだけだ、刃先が多少埋まった所で致命傷には程遠い。

風魔小太郎が僅かに眉を顰める。全力の刺突が僅かに刃先を通すのみ——予想の数段、肉質が硬い。「青以上」、と小太郎が呟いた。地面に降り立つ小太郎、差し込まれた剣の勢いで一步退いたモンスター。

互いの間に生まれる一呼吸分の間——静寂。

次の瞬間に放たれたのはモンスター―渾身の砲撃。口元の外殻を開け放ち、溜めなしでの超至近距離砲撃^{ゼロレンジブレス}。圧縮された炎は極光となつて撃ち放たれ、反動で首が微かに仰け反る。見てから反応する事は不可能、十歩も離れぬ距離で放てば必中と言ひ換えても良い。

それを風魔小太郎は舞踏の如く、ひらりと身を回転させ躲して見せた。

揺れる髪先が極光に焼かれ、遙か後方から爆音が鳴り響く。

「バツシュ」

回転した勢いをそのままに、小太郎はモンスターの頸元に埋まった劍の柄、それを勢い良く殴りつけた。甲高い金属音、同時に凄まじい衝撃。柄と盾の表面が火花を散らし、刃が楔の如く撃ち込まれモンスター―の頸元から黒とも茶とも見れる液体が噴出する。背後から飛来する爆風、熱波、破片を気にも留めず小太郎は舞う。

撃ち込んだ劍、その柄に蟲糸を繋げ、云った。

「起爆」

劍に付着した爆発エキスが緋色の爆炎を生み出す。内側から熱波に晒され、視界をも奪われたモンスターは声なき咆哮を上げる。風魔小太郎は爆発に乗じ、蟲糸を用いて劍を回収。するりと手元に戻った劍を握り、立ち上る炎を見つめる。

頸元への刺突、内部爆発、並みのモンスターならば頸ごと弾けて死んでいる。手応えはあった、しかし微塵も油断はしない。それを証明するかの如く、爆炎を裂き、咆哮するモンスター。頸元は抉れ、不気味な液体と破片――限りなく肉片に近い何かを撒き散らすその姿、確かに深手だろう、重症だろう。しかし未だ健在。その双眸は風魔小太郎のみを射貫いていた。

小太郎は未だ二本の足で立つ大敵を冷徹に観察する。

イカれた生命力だと思つた。同じ生物とは思えない、否、事実生物ではない可能性の方が高い。そもそも怪物の喉元から吹き出し地面に撒き散らされるそれが血液なのかどうかも分からない。

地面に撒き散らされた液体は染みとなり、程なくして蒸気へと変わる。熱気――肌を焼く熱波、それはモンスターから放たれていた。見

れば彼奴の周辺、その景色が異様に歪んで見える。

ボシユ、と音が鳴った。モンスターの外殻、その隙間から圧縮された蒸気が噴き出ていた。

かこん、と口元の面頬が外れる。

その奥から暗闇が覗いていた。この動作は一度見た、圧縮された砲撃による攻撃。小太郎は僅かに盾を構えたまま、身体を斜めに逸らす。丁度射線上から逃れる様に。

しかし、攻撃が来ない。

小太郎が予測した攻撃速度を下回る。モンスターの口元に火が灯らない。その差異に勘が囁く。違う、砲撃ではない。風魔小太郎が訝しむと同時に、その見えざる攻撃は放たれた。

「――」
足元の砂利が跳ねる、水面が弾ける、肌が波打つ。

同時に小太郎の体が見えない何かに押し出されるような形で、後方へと吹き飛ばされた。

攻撃の名は――音撃。

「づッ――!?!」

能面の様であった風魔小太郎の表情が初めて崩れた。両耳から僅かな血が噴き出し、どろりと眼球から血が滴る。地面に叩きつけられた小太郎は何度か転がり、背中から地面を擦って停止した。攻撃を真面に受けた肉体は小刻みに震え、意志に反し動かない。

脳に甘い痺れが走っていた、酩酊感と言い換えても良い。思考が纏まらず、あらゆる機能が正常に機能しない。指先を目先に持つてくれれば、するりと剣が手から抜け落ちた。剣を握る握力すら奪われた。

音と云う攻撃は、防げない。盾を構えようが、避けようと動こうが、全てを回避するという事は不可能。ましてやそれが殺傷力を伴うのであれば、この状態もむべなるかな。

何という初見殺しか、風魔小太郎は地面に身を預けたまま静かに目を細めた。

「……………」

面頬を嵌め直し、ゆつくりとした足取りで近付いて来るモンス

ター。その巨軀を見上げたまま、風魔小太郎は変わらぬ表情で告げる。碌に動かぬ舌を弾き乍ら。

「次は、狩る」

告げ、彼は静かに意識を失った。

■

倒れ伏し、意識を飛ばした小太郎。モンスターはそんな小太郎の姿をじっと見つめ、暫し沈黙を守った。ぴくりとも動かない四肢、消え去った強者の気配——対象は完全に沈黙している、それは確かだ。

緩慢な足取りで小太郎の傍に立ったモンスターは、のそりと腕を振り上げる。意識のない狩人ひとり、その膂力で以て頭部を破碎する事など容易い事。

介錯を成そうとして。

「随分人に似た姿ですこと」